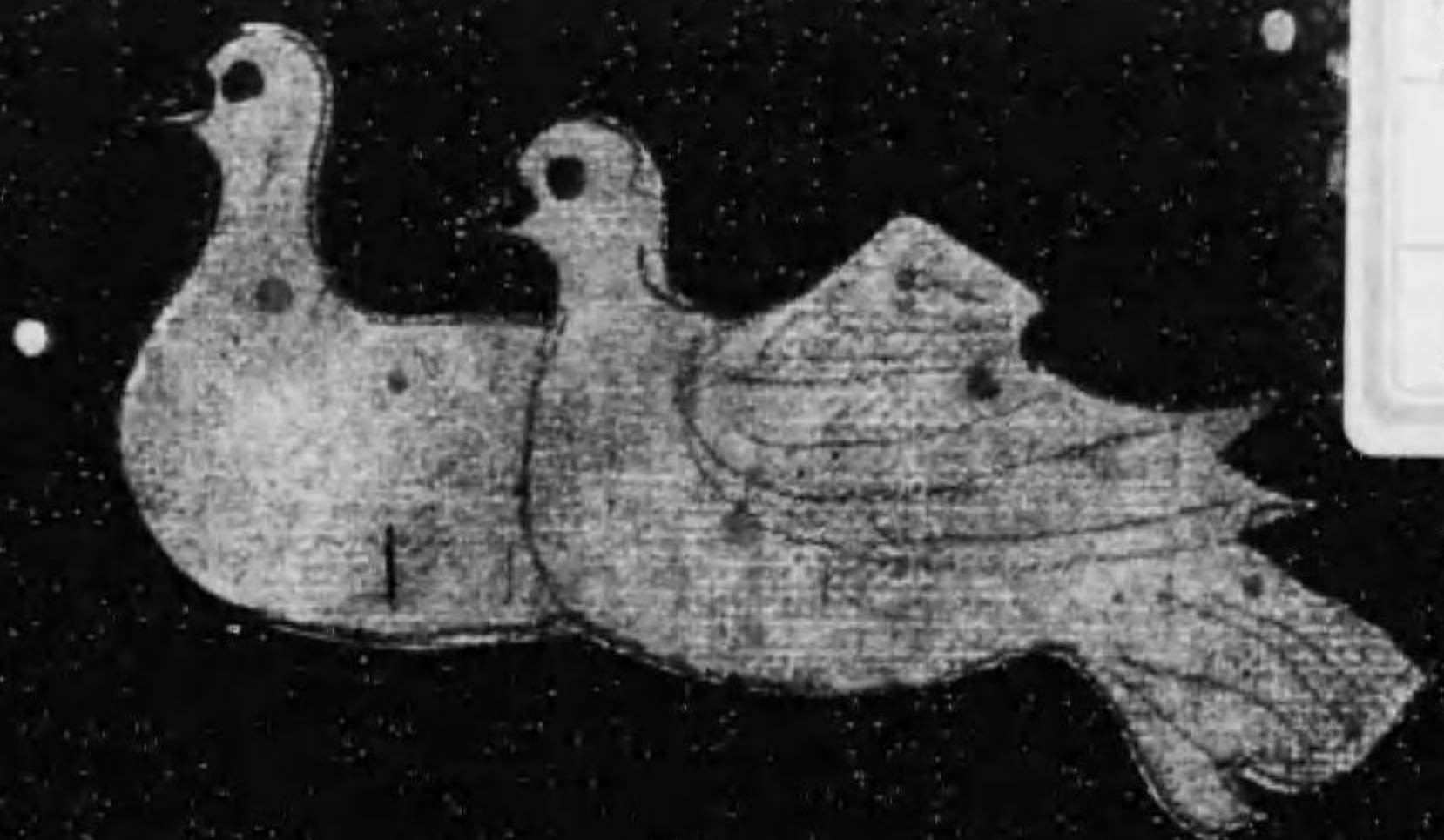


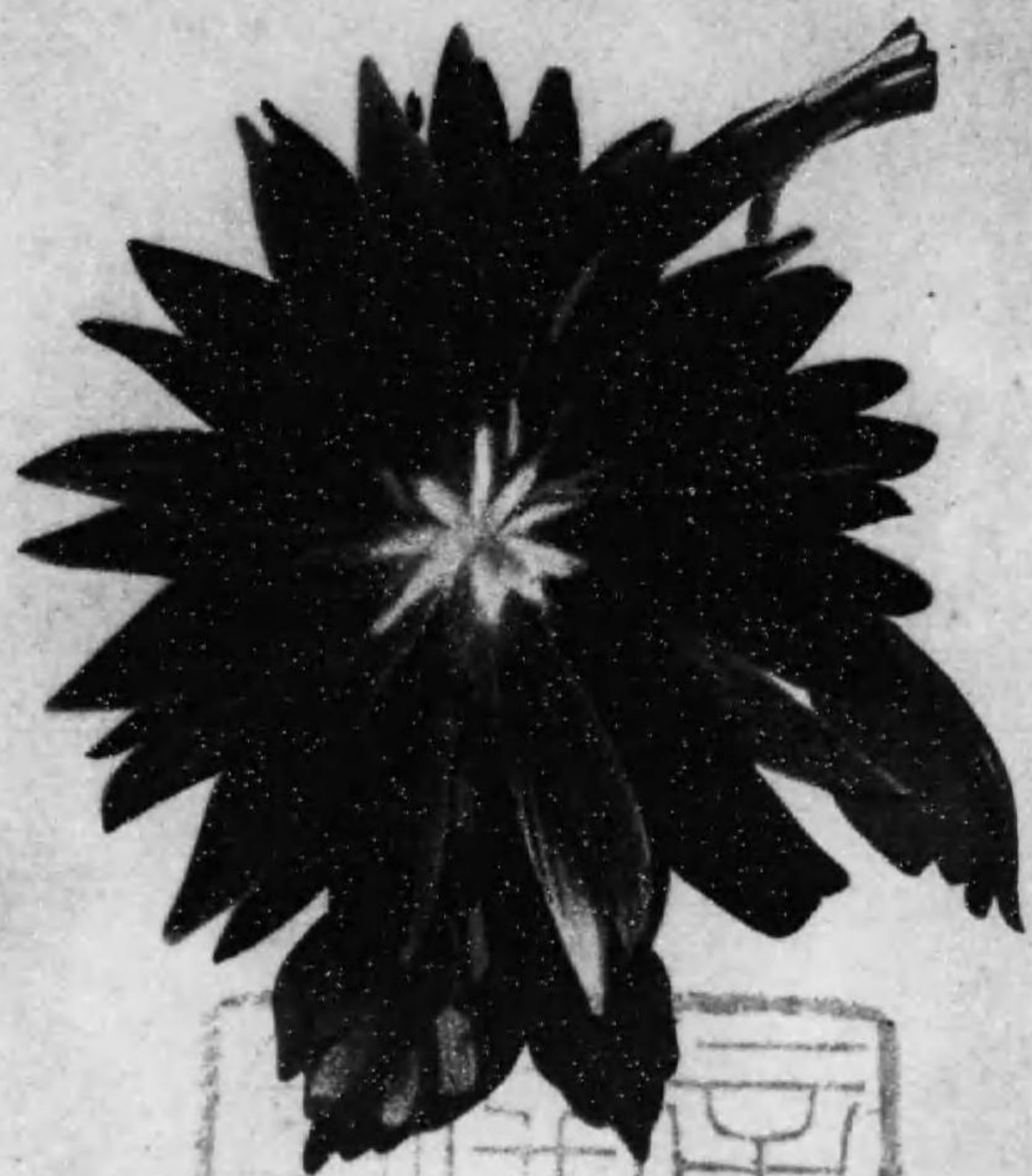
501

205



始





大正  
10 11. 7  
内交

巻のやりだ





## まへがき

「母のお伽噺」はお子様のためにお母様がたに御覽下さい、と希ふお伽噺を蒐めた叢書であります。それはお母様が御自身御讀み下さりたいお話もあれば、また直接お子様に讀んでお聴かせ下さりたいお話もあります。著者はこのお伽噺を編むに當り第一にその題材に於て、今の子供の心理に立ち入つた理解ある取扱ひを致さうと力めました。第二に、その題材が古い口碑や傳説であつても、内容味に於ては、近代人の思想や感情とはなるべく交渉の深い題材を選ぶことに力めました。第三には、そのお伽噺の現はし方を、著者が直接子供達の前にしてお話をする時の経験から、最も純な子供の心持ちに添ふやうにと、つとめて新しき試みを致しました。著者は「お伽噺」といふものは、話者の言語や態度に於て如何に熱情が加へられて

も、話者自らがお話の世界の人となり切らない間は、決してお伽噺本質上の効果を収め得られないと信ずるものであります。随つて著者はこの諸篇を執筆するに際して、わざと文辭を弄んだり、或は衝動的に、子供をむやみに吹き出させたり、泣かせたりするやうな弊に陥ることを常に警戒いたしました。

この「だりやの巻」に編みました二十四話の内、「千人結び」と「遣つた牡鶴」は著者の創作、「千早姫」は名劇物語、「お結びコロリン」と「百合と赤ちやん」とはわが國の口碑、「小僧さん」は事實談、その餘の十八篇はこの兩三年来、英米で刊行された話し方の叢書や、お伽書から題材を取り、著者の信ずるお伽噺の立場から、任意に改作いたしましたものであります。

此叢書の刊行は一に畏友文學士石井直氏の好意による處、茲に深く感謝の意を表します。

著者は今秋、過去十年間の創作お伽噺中より選びました七十篇のお伽集「冷光お伽噺」を、東京の富山房より刊行することを、この書の讀者のために申し添へて置きます。

大正八年八月十五日

房州勝山町の海の家にて

及びす山のみんみん蟬を聴きつゝ

大井冷光

装幀と装畫——廣島新太郎

赤ちやんの口繪——大作眞津子

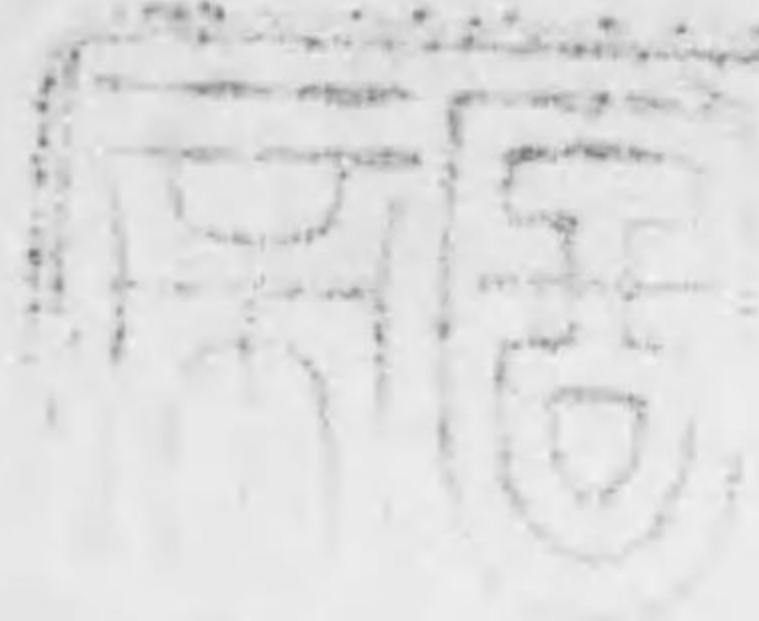
(十五巻)

母のお伽噺目次

一	頬白と朝顔	一六
二	三郎の夢	二六
三	狐の袋	二七
四	白い艇	四〇
五	月見草の咲く家	四九
六	熊少年	五九
七	濱の火事	七六

一七	道草小太郎	・二七九
一八	まり子の牛	・二〇四
一九	小僧さん	・二〇九
二〇	羊飼ひ	・二二五
二二	遺つた杜鶏	・二三四
二三	小猫と黒猫	・二三〇
二三	駒鳥の歌	・二四三
二四	千人結び	・二五五

八	石に成る山	・八六
九	山男と鬼鳥	・九三
一〇	千早姫	・一二三
一一	お日様と薔薇	・一四五
一二	母さん猫	・一四八
一三	賢い鶏	・一五二
一四	百合と赤ちやん	・一五六
一五	氣の好い熊	・一五九
一六	お結びコロリン	・一七〇



二四 千八拾五

二三 調子

二二 小

二一 大

二〇 洋

一九 地

一八 一

一七 二

頬白と朝顔

朝

顔が野原に生えてゐました。この朝顔はいつも野原を這ひまはりながら花が咲きますので、一度も蔓竹に咲いたこと

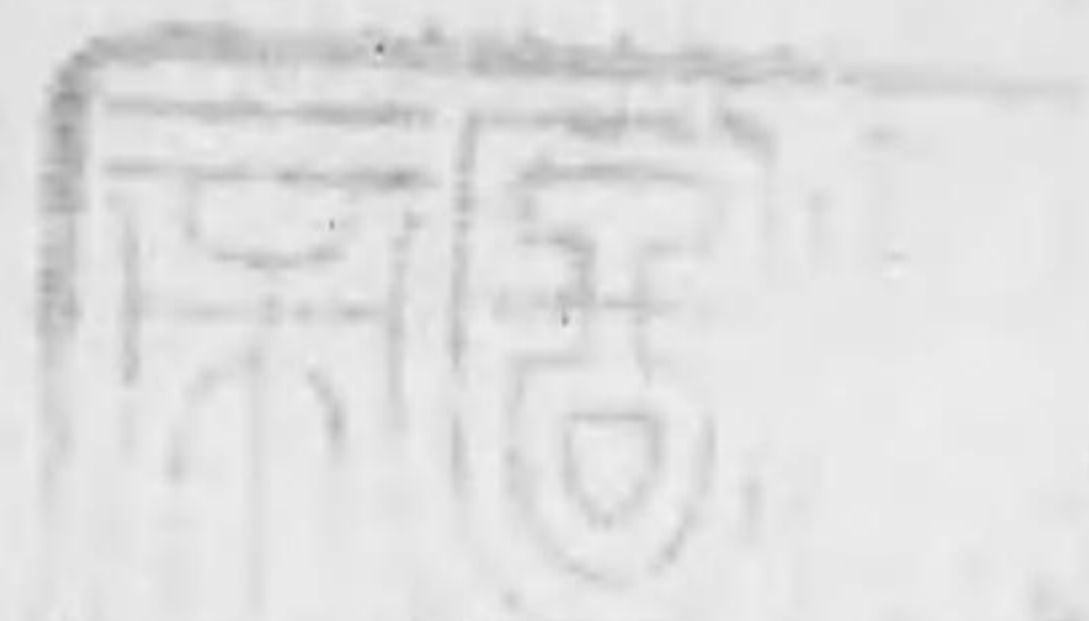
はありませんでした。

處がこの野原の中程に一本の杉がありました。その茂つた枝の間

には頬白が巢を造つてをりました。巢の中には雛兒がたつた一羽、

それも片羽根が挫けて飛ぶことの出来ない可哀さうな子供でしたが





母さん鳥はたいそう大切に育て、おました。

毎日母さん鳥は餌を取りに出てゆきますが、かへると、このびつ

この子供に、その日見て来た四方山のお話をしてやりました。それが子供には一番楽しい日課となるのでした。

或朝母さん鳥は野へ出ますと、すぐ樹の下にきれいな朝顔が咲き初めたのを見ました。歸るとすぐにそのことを子供に話して、

「それはそれはたいへんにきれいな大きな花だよ、赤いのもあれば紫のものもある、絞りのもあれば白いのもある、ほんとにお前にも見せたい花だ」といひますと、子供は、

「さう？ そんなにきれいなもの、見たいなア」といひました。

次の朝になると朝顔の花の数は澤山に殖えました、それを見た母さん鳥は歸るとまた子供にそのお話をいたしました。子供はいよいよ見たいと申しました。然し母さん鳥には朝顔の花を子供に見せるのに、持つてかへることはどうしても出来ませんでした。

いつかこの母子の望みを、下に咲いてゐる朝顔が聴きました。そしてびつこの子供をたいへんに可哀さうに思ひました。

「ほんとにあんなに私を見たがつてゐるんだもの、どうかして見せてやりたいものだ」といつて朝顔はあちこちと這ひまはりました。

やがてその中に杉の根元へ一本の蔓が届きました。  
「さてよ、この幹にからまつて這ひのぼつたら、あの巢まで行ける  
かもしれないよ」といひますと、元氣をだして樹の幹を這ひのぼり  
ました。二日三日、四日五日と根氣よく上るうちにとうとう朝顔の  
望みがかやつて、その一本の蔓は頬白の巢の縁まで這ひつきました、  
そしてその次ぎの朝、その巢の縁できれいな大きな朝顔の花がよろ  
こばしそくに咲きました。  
可哀さうなびつこの子供はその朝、思ひやりの深いこの朝顔の花  
を見て、どんなにびつくりしたこととせう。かねてから見たい見た

いと思つてわた望み  
が、愈めてたく届  
きましたので、たい  
へんに喜び、すぐ朗  
かな聲で囀りました。  
た。その喜びのこゑ  
をきいた母さん鳥の  
喜びはまたどんなで  
ありましたでせう。



## 三郎の夢

あ　　る國の王様に、太郎、次郎、三郎といふ三人の王子がありました。

王様はある晩、この三人の王子をお呼びになつて、

「お前達は今夜どんな夢を見るか、よくその夢をおぼえておいて、明日の朝お父様にお話しをおしよ、よろしいか、お父様はお前達の夢をききたいのだ、もしよい夢を見たひとには御褒美を取らせるぞ」

とおつしやいました。

王子達はよろこんでお約束をしました、なるだけよい夢を見るように、と、その晩はいつもより早くやすみました。

つぎの朝、三人が王様のお前に出ますと、太郎は先づ申しませうに、

「お父様、私は大きくなつてからお父様の後をついでこの國の王様になつた夢を見ました」

「よし、それはよい夢を見た」

次郎はつぎに申しました。

「お父様、私は大きくなつてからこの國で一番で偉い家來になつた夢を見ました」

「よし、それもよい夢だ」

と王様はおつしやいました。さて今度は三郎が申上げることになりました、處が三郎は、

「お父様、僕はへんな夢を見ましたよ」といひますから、王様は、

「へんな夢つて、どんな夢か、はやくはなしをしてごらん」

「あのねお父様、僕は手を洗つた夢を見ましたの」

「手を洗つた夢を……」

「さうです、僕が手を洗はうとすると、お父様が金の水注ぎを持つて来て、僕の手に水をかけて下さつたの……」

「何を……わしがお前の手に水をかけたと？」

「さうです、お父様がまるで僕の家來見たやうに水をおかけになつたんです、僕ほんとうにへんな夢だと思ひます」

それをお聞きになつた王様はたいへんなお腹立ちです。

「夢にでもなんでも、そんなお父様を家來にするやうなまぢがつた者は、暫らくもこの國におくことはならぬ、早くゆけ、早くどこへでもいつてしまへ！」と、いふことで三郎をすぐさまお城から逐ひ

出でしなさいました。

三郎さぶらうはたいへんに困こまりましたが仕し様やうがありませんから、何なんの的あてもなく遠とほい遠とほい旅たびをすることになりました。幾いく日も幾いく日も歩あいてをりますと、やがて三郎さぶらうは淋ましい山やまかげの森もりにつきました。見みるとそこには洞ほら穴あながあつて、その洞ほら穴あなの中なかに大おほきな鍋なべがあつて、おいしそうな御ご馳ち走そうがツツと煮にえてゐます。

三郎さぶらうは、もう今朝けさから御ご飯はんもたべないので、お腹なかが空すいて困こまつてかたところですよ、あんまりおいしさうな匂におひがするので、誰たれが煮にえてゐるのかとあちこち捜さがしますが、誰たれもあたりに居ゐりません。それか

ら三郎さぶらうは待つても待つても誰たれも来きませんので、とても我慢がまんが出来できなくなりました、とうとう三郎さぶらうはその鍋なべの御ご馳ち走そうを少すこし取り出だしてたべました。

するとそのおいしいこと、三郎さぶらうは舌した鼓つみをうちながら思おもはずお腹なか一いぱいたべますと、不ふ意いに森もりの奥おくから、さわがしい足あし音ねがきこえて来きました。

三郎さぶらうはびつくりして見みますと、やがて洞ほら穴あなの前まへへ、盲めくら目めになつた一人ひとりのお爺ぢいさんが、澤たく山さんの山やま羊やぎを連つれて来きました。

お爺ぢいさんは洞ほら穴あなへ入はいると、手てさぐりで御ご馳ち走そうの鍋なべを取とらうとしま

すから三郎はすぐそのお爺さんの前に出て、「今あんまりお腹が空いたので、勝手に入つて御馳走をたべました」といつて、おわびをい  
たしました。お爺さんはそれをきくと、「どうしてまたこんな處へ來  
たのか」と訊ねましたので三郎はお父様に國を追ひ出されて、行くと  
ころがなくて困つてをることを詳しくお話いたしました。するとそ  
のお爺さんは、「それは氣の毒だ、行く處がなければこの洞穴に永く  
止つておいで、お爺さんは、お前に山で山羊を遊ばせて貰へたら、  
たいへんにありがたい」といひました。

三郎はよろこんでお爺さんの家のものになりました。

つぎの日、三郎は山羊を遊ばせに行くことをいひつかりました、  
その時お爺さんがいひますには、

「向うの山を八つまで超していつても宜しいが、九つ目の山へは決  
して登つてはいけないよ、あの九つ目にゆくと恐ろしい鬼がゐて、  
人間さへ見ればすぐ眼の玉を取らうといふから……ごらん、このわ  
しの眼もうつかりあの山へ入つたときに、その鬼に取られてしまつ  
たのぢや」

三郎はきいてびつくりしました。そしてお爺さんのいふ通り九つ

目の山へは行かぬお約束をいたしました。

處がいつて見ると、山は一つ超せば一つだけ山羊の好きな草が澤山にあります、つひ二つ超し三つ超して登りますうちに、いつかとうとう三郎は九つ目の山まで来てしまひました。

すると忽ち雷でも落ちたやうな響きがおこつて、三郎の前にも見るも恐ろしい大きな鬼が現はれました。

「こら小さな子供、この山へ登るとお前の眼の玉を取つてしまふぞ」と怒鳴りましたので三郎はギョツとしました、が、しかし直ちに三郎はうまいことを考へましたので、かう答へました。

「眼の玉が欲しければいくらでも上げる、然しねえ君、君が強いか、僕が強いか、一つ跳びつくらをしてから定めようぢやないか」

「なあに、跳びつくら？」と鬼はいひました。

「さうだ、跳びつくらさ、僕が若し君にまけたら僕の眼の玉を上げるさ、その代り、若し君が僕に負けたら、あべこべに僕は君から眼の玉をもらふぜ」といひました。

すると鬼はわらひながら「よし、よし」といひました。

そこで三郎はすぐ近くの谷から、柚が大きな材木の、縦に引き割つてあるがまだ根の處を伐りはなしてないものを見つけて、擔いで

来ました、そしてそれを真直に鬼の前にたてますと、その根の處に楔子を填めてその上の伐り割つた裂け目を跳ぶことにしました。

三郎は先づその裂け目をヒラリと跳びこえました。鬼はそれを見るとき、

「なアんだ、それつくらのるところを跳ぶのは何でもない」といつてすぐ同じやうに跳びました、處が三郎は鬼の跳ぶ拍子に根元の楔子をボンと外しました。

するとたいへん、木の裂け目がピシヤリとふさがつたものですから、鬼はその間にしつかり挟まつてしまひました。

「苦しい！ 苦しい！ 放してくれえ」と大きな聲でうなりますので、三郎は大威張り、

「どうだ降参か」

「降参！ 降参！」

「降参ならばやくお爺さんの眼の玉をかへせ」

「すぐ返しますからどうかはやく放して下さい」

「それでは免してやる」といつて、また木の根元へ楔子を打ち込んで、鬼をゆるしてやりました。

すると鬼はふるへながら自分の洞穴へかへりました、間もなく



小さな壺をもつて来ました。

「そんなものは何か」と三郎はたづねますと、鬼は、

「この壺の中にあのお爺さんの眼の玉を融かし込んであります」

「さうか、そんならよこせ」

大威張りて受取つて、山を下りました。

洞穴にかへつた三郎は、お爺さんに鬼を負かしたお話をして、取つて来た壺をわたしますと、お爺さんはたいへんとよろこびました、すぐその壺の蓋をあけますと中には水晶のやうな水が入つてゐまし

た、お爺さんはその水で眼を洗ひますと忽ちばつちりとあいて、元のとほりよく見えるやうになりました。

そこでお爺さんはたいへんによるこび、三郎に「御褒美をあげようこちらへおいで」といつて洞穴の奥の一番奥へ連れてゆきました、その物置の戸を明けますと、中からバツと光る物、見るとそれは生きた黄金色の馬でした。

「三郎、お前はこの馬に乗ることが出来るだらう、お爺さんの大切な寶だがお前に上げる、はやくこれに乗つてお前の國へお歸り、かへつたら屹度お父様に叱られたといふあの夢がほんたうになるぞ」

といつてお爺さんはその馬を曳き出して三郎に渡しました。

三郎は喜んでそれを貰ひましたが、すぐその馬にとび乗らうとしますと、お爺さんは、

「ちよいとお待ち」といつて見苦しい驢馬の皮を取り出し、

「そのまゝ乗つていつたら人目について大きな災難をうけるだらう、旅をする間はこの驢馬の皮を着せて行くはうがよいぞ」といつてすぐ黄金色の馬に被せてくれました。

三郎はお爺さんに厚くお禮をのべて、その馬にのり、洞穴を出ましたが、馬の足はたいへんにはやく、直にお父様の國につきました。

するとお城の前には幅三十間深さ四十間の大きな壕を掘つて、そのわきにこのやうな立札がしてあります。

この壕を馬に乗つて跳びこすものは、この國第一番のお客様として王様が手厚くおもてなしをなさいます。

その前に集つてをる人だちの話をお聞きすると、この立札が樹つてから、もうずゐぶん経つのださうですが、いまだに誰もこの壕を跳んだものがないといふことです。そこで三郎はすぐ自分が跳ぶことを申し出ました。

お城では三郎がぼろ／＼に破けた着物を着て、汚らしい驢馬に乗つてをるものですから、誰もこれが王様の三番目の王子の三郎様だと思ふものではありません、「どこの貧乏な子供だか知らないが、あのお壕を跳ぶとは生意氣だ、屹度壕の中へ落ちて死んでしまふだらう」といつてみんなでわらひながら見物いたしました。

處が三郎の乗つてをる黄金の馬はこんなお壕を跳ぶくらゐは樂なことですから、「ヒ、ン」と一聲なきますと、たゞの一飛びで、ひよいとお壕を跳び超えました。

それを見た家來どもはびつくりいたしました。すぐに王様にその

ことを申上げますと、三郎のお父様の王様がお聴きになつてたいさうなお腹立ちです。

「汚ない驢馬に乗つてあの壕を跳んだといふか、無禮な奴だ、その様な怪しい奴はすぐ土牢へぶち込んでしまへ」とおいひつけになりました。

可哀さうにも三郎は壕を跳んだお咎めて、馬と一しよに土牢に入られてしまひました。

ところが三郎は「今こそだ」と思ひました。さつそくその牢屋の中できれいな着物に着更へますと、馬にも今まで着てゐた汚ない驢

馬の皮をぬいでやりました。すると元は黄金色の馬ですからあたりが忽ちきら／＼光り出しました。それを見た城の役人はびつくりして、すぐ王様に申し上げました。

「王様たいへんでございます、いま牢屋の中には神々しい金の馬をつれた立派な方がおでましになりました、それは先程お壕をお跳びになつたあの方とそつくりでございます」

と申し上げますと、王様もたいへんに驚きになり、すぐ御自身で牢屋におでましになりますと、なるほど神々しい方が黄金の馬に乗つておいでになります、そこで王様は今までの無禮をおわびになり、

すぐにお城の一番立派な御殿へお通しになつて、いろいろ手厚いおもてなしをなさいました。

やがてそのお客様に王様は御自身で金の水注ぎを以て、お手水をおつかはせになりましたが、その時そのお客様は嬉しさうに王様の手を握つて、

「お父様、私はお父様の子の三郎でございます、私の見ました夢はやつぱりほんたうになりましたね」と申しました。

その時の王様のびつくりなさつた顔が見えるやうではありませんか。

三郎はまた元の通り、兄さまたちと一しよに幸福に御殿にすむことになりましたとさ。



### 狐の袋

### 狐

は旅に出かけました。

野中の切株のそばまで来ますと、地蜂の巣を見つけたので、擔いでゐた空の袋を下し、地蜂を一匹つかまへてその中へ入れ、キヌツと口をしめると、すたくと歩き出しました。

村ばなの家の前まで来ますと、狐はその家の主婦さんにあつて申しました。

「お主婦さん今日は、お氣の毒ですが、この袋を預かつて下さいな、俺は急に奎さん家まで用事が出来たから——」

主婦さんはさいて、

「いゝともいゝとも、たしかに預かりましたよ」といひました。

「だがねお主婦さん、この袋の中には大切なものが入つてをるから明けないやうにして下さいな」

「いゝともいゝ」と

狐が出かけた後で主婦さんは、「袋の中の大切なものつてなんだから、見たいなア」と思ひました、そこでそつと口を細目にあけて中

を覗きますと、そのはずみに地蜂がブーン。

「おやつ」と驚いてつかまへやうとしますと、丁度そこへ牡鶏が飛んで来てバクリと一口にその地蜂を呑んでしまひました。

「あらまア」と主婦さんが驚いてをる處へ、はや狐が歸つて來ました。そこで仕方がないから主婦さんはありのまゝを狐につげますと狐は仰山さうな顔をして、

「そりや困つた、そんなら代りにその牡鶏を貰ひませう」

といひました、そして牡鶏を袋の中へ入れますとすたく出かけてゆきました。

狐は次ぎの村端の家の前までゆきました。

「お主婦さん今日は、お氣の毒ですがこの袋を預かつて下さいな、俺は急に奎さん家まで用事が出来たから」といひました。

そこの主婦さんもすぐきいて、

「いゝともいゝともたしかに預かりましたよ」

といひますと、

「だがねお主婦さん。この袋の中には大切なものが入つてをるから明けないやうにして下さいな」といひました。

「いゝともいゝとも」と主婦さんは答へました、が、狐が出かけた

後で、主婦さんは見たくてたまらなくなりました、そこでそつと袋の口をあけて見ますと忽ちバタバタと牡鶏が飛び出しました。

「あらあら」といふ中に、椽允にゐた豚がとびかゝつて、その牡鶏をたべてしまひました。そこへ狐がはや歸つて来ました、主婦さんは仕方がなくありのまゝを狐につげました。すると狐は仰山さうな顔をして、

「そりやいけない、そんなら代りにこの豚を下さい」

とさういつて、袋の中へ豚を入れ、やつこらさとかついで出かけました。

狐はつぎの村端の家までゆきました。

「お主婦さん今日は、お氣の毒ですが、この袋を預かつて下さいな、俺は急に奎さん家まで用事が出来たから」といひました。

そこの主婦さんもすぐきいて、

「いゝともいゝとも確かに預かりましたよ」

「だがねお主婦さん、この袋の中には大切なものが入つてをるから、明けないやうにして下さいな」

「いゝともいゝとも」

狐が出かけた後で主婦さんは見たくてたまらなくなりました。そ

こで袋の口をそつとあけますと、忽ち豚がピー／＼いつて跳び出しました。

「あらあら」といふ中に、その豚を庭先きにゐた牡牛が来てたべてしまひました。

主婦さんはびつくりして困つてゐますと、そこへ狐がはや歸つて来ました、そしてそのことをきくと仰山さうな顔をして、

「そりやいけない、そんなら代りにその牛を下さい」

といつて牡牛を貰ひ、袋の中へ入れるとキユツと口を締めてウントコシヨとかついで出かけました。



狐はつぎの村端の家までゆきました。

「お主婦さん今日は、お氣の毒ですが、この袋を預かつて下さいな、俺は急に奎さん家まで用事が出来たから」

「いゝともいゝとも、確かに預かりましたよ」

「だがねお主婦さん、この袋の中を明けてはいけませんよ」

「いゝともいゝとも」

狐が出かけた後で主婦さんは見たくてたまらなくなりました。そこでそつと袋の口を明けますと、中から大きな牡牛がモーと鳴きながら跳び出しました。傍にゐた子供の三吉が面白がつて

「やアやア」と追かけました。すると牛は驚いて野原へ一散に逃げ出し、とうとう姿をかくしてしまひました。

そこへ狐がはや歸つて来ました、そしてそのことをきくと仰山さうな顔をして、

「そりやいけない、そんなら代りにその三吉を下さい」

といひ、すぐ三吉を袋に入れました、そして今度は袋の上を紐でしつかり結へてヤツコラサと擔いで出かけました。

狐はつぎの村端の家までゆきますと、その主婦さんは、家の子供にカステラを焼いてゐるところでした。

「お主婦さん今日は、お氣の毒ですが、この袋を預かつて下さいな、俺は急に奎さん家まで用事が出来たから」

「いゝともいゝともそこにおいときなさいよ」

と主婦さんは忙しうにカステラを焼いてみました。

やがてカステラが焼けました。主婦さんの子供たちは、

「母さんもう焼けたの？早く頂戴な」

「母さん、あたしにも早く頂戴な」

とねだりました。すると袋の中に入つてゐた三吉も、おいおい匂ひを嗅いで思はず、

「おばさんあたしにも早く頂戴な」といひました。主婦さんはびつくりしました。

「オヤこの袋がものいふこと」

「袋ぢやないんですよ、袋の中の三吉ですよ」

「なに、あの隣村の三ちゃんかえ」

「ええ、入つてゐるんですよ」

「まア驚いたわねえ」と主婦さんは急いで袋を開いて三吉を出してやりました、しかし狐が取りに来ると困ると思つたから、丁度庭先にゐる犬のペスを連れて来てその後へ入れ、もとの通り紐で結きま

した。

「さア三ちゃんや奥のお部屋へおいで、太郎や次吉と一緒にカステラを上げるからね」

主婦さんは子供だちを奥の部屋へ入れてカステラを切つて居ますと、そこへ狐が歸つて來ました。

「お主婦さん袋を下さいな」

「そこにありますから持つておいで」

狐は袋を見ると元のまゝに結へてありますから、そのまゝ引擔ぎ「どうもお邪魔様でした」と出かけました。

やがて狐は森の中へ入りました。森の中のいつも食事をする處までゆくと袋を肩から下しました。

「人の子供だ、うまいだらう」とうれしさうに袋の紐を解きますと、中からペスが「ワン」と跳び出し、狐に噛ついたからたまりません、狐はとうとうペスに殺されてしまひました。



## 白い艇

港

の巖角から、浪の上へ恰好のよい松が枝を垂れてゐました。その松の幹につながれて真白な一隻のボートが浮んでゐました。これはこの濱の松林の奥に見える別荘から坊ちゃん達が時々来てこの近くの海を乗つて廻るものでした。

ある日別荘の坊ちゃん、番人の爺やと一しよにこのボートを漕ぎ出しました。すると間もなくその沖合を「ときは」と記した一隻

の自働艇が浪を切つて進んで来ました。見るとその艇にのつてゐるのは爺やのお友達だったので、爺やはすぐ綱をなげてこちらの白ボートを曳いて貰ふことに致しました、白ボートは忽ち「ときは」の後から勢ひよく浪を切つて進みました。

「剛氣だなア」と爺やがいひました。

「すてきすてき」と坊ちゃんが叫んで、躍り上つてよろこびました。がそれよりもつと喜んだのは白ボートでありました。白ボートは生れてから今までこの渚に近い浅瀬ばかりを、あちこち坊ちゃんに漕ぎ廻されましたが、こんなに遠く、そしてこんなに早く沖へ走

り出たことがなかつたのです。大きな蒸気船にも出あひました。妙な恰好の潜水艇にも出あひました。遇ふもの、見るもの、何から何まで珍らしいものばかりなので、白ボートはもう夢心地で港をめぐりました。

やがて再び巖の近くにかへり、「ときは」と離れますと、何だかもう急になしくなつて泣きたくなるくらいでありました。

そんなことを白ボートが考へてをるとは知らぬ爺やと坊ちやんとは、いつもの通りに白ボートを松の幹に繋いで別荘へかへりました。間もなく日が暮れました。あたりは眞暗になりましたが、白ボ-

トはまだ今日乗り出したことを考へつゝやけてをりました。

「ときは、といふ船は幸福だなア、あんなに面白相に早く沖を走りまはることが出来るのだもの、そしていろんな面白い物を見たり聞いたり出来るんだもの、私にも若しあのやうに發動機があつたときはどんなにいゝだらう、そして私ひとりで、思ひのまゝに浪を切つて沖の遠くまで漕ぎ出すことが出来た時はどんなにうれしいだらう、たつたひとりて走つた時は、そして浪を突つ切つた時は、沖に出でいるんな珍らしい者を見た時は、……あゝときはときは、ときははになつたら……」

とひとり言をいふうちに白ボートはうとくと眠りました。

すると不意に上の松の枝がサーツと鳴つて、思ひ切り高い浪が打ち寄せて来ました。驚いて眼をさました白ボートは松に結へられてをる綱が浪に揺られるたびに切れさうになるので、たいへんに喜びました。

「うれしい、早く大きな浪が来てくれ、そして私が沖へ思ふさま出ることの出来るやうに綱を切つてくれ、はやく〜」といつてゐます中に海はだんく〜ひどく荒れ、いよいよ高い浪がおつかいおつかい押寄せて来て、忽ちブツリと綱を切りました。

白ボートは思はず「アツ」と叫びましたが、そのまゝ引く浪と一しよに速く速く「ときは」の走るのよりはもつと速く沖の方へ走り出しました。

「やア占めたぞ、愈望みが叶つたぞ」といひながら浪と共に走つてゐた白ボートはやがてズーツと低く低く海の底まで吸ひ込まれるやうになつたと思ふと、また高く浪の上へ突き上げられます、そのあひだに舷を打つ恐ろしい浪、まるで木の葉の風に吹きとばされると同じやうに流されますので、白ボートは眼がくらみ、體が砕けさうになりました。

その中に大粒の雨が落ちて来ました、俄に大夕立、白ボートの中  
にたまる水はだん／＼嵩んで、今にも沈んでしまひさうです。

「あッ苦しい、歸りたい、こんな夜ではとてもたまらぬ」と白ボ  
ートは幾度か叫んで港へかへらうと致しますが、浪が高い上に、眞暗  
な夜中、どこが自分の繋がれてゐた港の方向かちつともわかりませ  
ん。白ボートはもうへと／＼に疲れてどうにも仕様が無くなつてし  
まひました。

白ボートは泣き出しさうな思ひで申しました。  
ひとりて沖へ出るのもう凝り凝りだ、私はやつぱりあの巖のか

げにつながれて、坊ちゃんのお遊び相手をすればよかつたのだ、あ  
あ苦しい、どうかして早くあの松の蔭にかへりたい

然し今いくら泣き言をいつてもどうすることも出来ません。

やがてうす白い雲が見え出し、夜が明けかけました。が、浪は愈  
高くなつて白ボートは大きな巖の上に打ち上げられました。

「はつ」と思つた時にはもう浪がひいて、自分だけが堅い堅い巖の  
上に轉げ出されてゐました。

又あのやうな高い浪が来たら白ボートは巖に撲つかつて滅茶々に  
打ち砕かれたかも知れません、幸この時この巖のむかうに貝を

拾つてゐた漁師がゐましたので白ボートは綱  
で引き止められ、やつと命が助かりました。  
時化が止んでから別荘番の爺やが白ボート  
を捜しに出て、漁師の手からうけとり、再び  
もとの港に連れかへりましたが、その時白ボ  
ートの體は白いペンキも剝げてしまつて、ま  
ことに情ない姿にかはつてをりました。  
その後白ボートは、二度と沖へひとりて出  
ることを望みませんでした。



## 月見草の咲く家

# 廣

い野原のまんなか、一棟の洋館がありました。その内には氣高い少女がひとりて住んでゐました。

夕になりますと、野原一面に月見草の花が咲き揃ひます、夕風に  
黄金色の花のゆらぐ姿は夢の國の蝶々を見るやうでありました。  
その頃には屹度洋館の窓から少女の優しい歌ひ聲が洩れました。  
ある日その月見草の花がぼつぼつと咲始める頃のことでした。遠



い野の向うから馬をうたせてこの一つ屋を訪ねた少年がありました。それは貴族の公子とも見えて、天鵝絨の服、金の拍車、羊皮の手袋も鞭の房もみなあてやかな行装でしたが、馬も人もたいへんに疲れてをる様子でした。

少年は洋館の前で馬を下りますと、入口の扉をコトコト叩きました。その扉には野薔薇の蔓がまっはつてうす紅の花をつけて居ました。

「御免、御免」と呼びますと、扉は明かずに上の窓から少女が顔をさし出しました。

「誰方でございますか」

「私は遠乗りに出て道を迷つたものです、馬も私もすつかり疲れてしまひました」

「まアお氣の毒でございますこと」

「今夜一晩泊めて貰へないでせうか」

「宜しうございます、その扉の鍵はこの裏に咲いてゐる月見草が預かつてゐますから、どうか御自分でお見つけなさいまし」

聞いて少年は困りました。

「それは何んな鍵ですか」

「それは花と同じ黄金色でございます」

そこで少年は馬を門の柱に繋ぎますと、すぐ裏にまはつてその鍵を捜し始めました。

處がこの月見草の色と同じ黄金色の鍵を、それもはや暮れ方の広い野原で見つけるといふことは、この少年にはまことに出来さうもないむづかしいことでありました。少年は花の一つ一つ、幹の一株一株をていねいに捜して廻りましたが、なか／＼見つかりませんでした。

その中に疲れが愈々出て、眼はたゞ花の黄金色にきらきら眩むばかり、もうとても我慢がしきれなくなりました。少年はこの花野の中をうね／＼と流れる小川のほとりに出ました。流れにはすが／＼しい蘆が生えて、油をとかしたやうにながる水には、もう宵の明星の影が寫つてをりました。少年は思はずそのほとりに腰を下ろしてじつと水の流れをみつめました。

すると誰か少年の耳元で呟くものがあります、振りむきますと、そこには月見草の花のやうな着物を着た女の人が立つてゐました、がそれは丁度この少年には母さまのやうに思はれました。

「光塵、いらつしやい、扉の鍵を上げますよ」

「オヤツ母さまにその鍵が見つかったんですか？」

「さうです、はやくあの扉をこれでお明けなさい」

少年は欣んで金色の鍵をうけ取りますと、いそいで洋館の入口にいつて鍵穴に嵌めました、ユトリ音がして譯もなく扉は明きました。少年は内へとび込みました。するとどうでせう。この洋館の部屋の模様は少年の家とそっくりでありました、見るとむかうの窓の下には一人の少女が編物の手を止めて淋しさうに夕空を眺めてゐます、それは此少年の妹にあたるなな子でありますから、少年はびつくりいたしました。

すると鍵を下さつた母さまもこの部屋へお入りになつて、なな子を御覧になると、

「まアななちゃん、どうしてそんなにしほれてゐるの」と仰しやいました。

「母さま……今晚もお兄さまのお歸りが遅うございますわね」とかなしさうに答へます、

「ええまだ歸らない、ほんとにあの子には仕様がありません」

「お父さまのお腹立ちをよく御存じなのにねえ」

「もうあの子は家の子供ぢやなくなるのでせうよ」

「あら母さまそんなことを……」なな子はそのまま、母さまの膝に泣き伏してしまひました。

少年はなな子の姿、母さまの姿、うすぐらい部屋のありさま、それを見るとたまらなく家が戀しくなりました。母さまも妹も父さまもなつかしくなつて、知らず知らずに涙ぐんでしまひました。

はつ、と思つて少年は眼をひらきますと、それはみんな夢でありました。あたりはもとの野川のほとりて、その流れにはもううるはしい明けの朝のお日様の影がうつつてをります。

「おや、もう夜が明けたのか、これはをかしいや」

少年は立ち上ると、洋館の入口には扉を明けて少女がにこにここと出迎へてゐました。

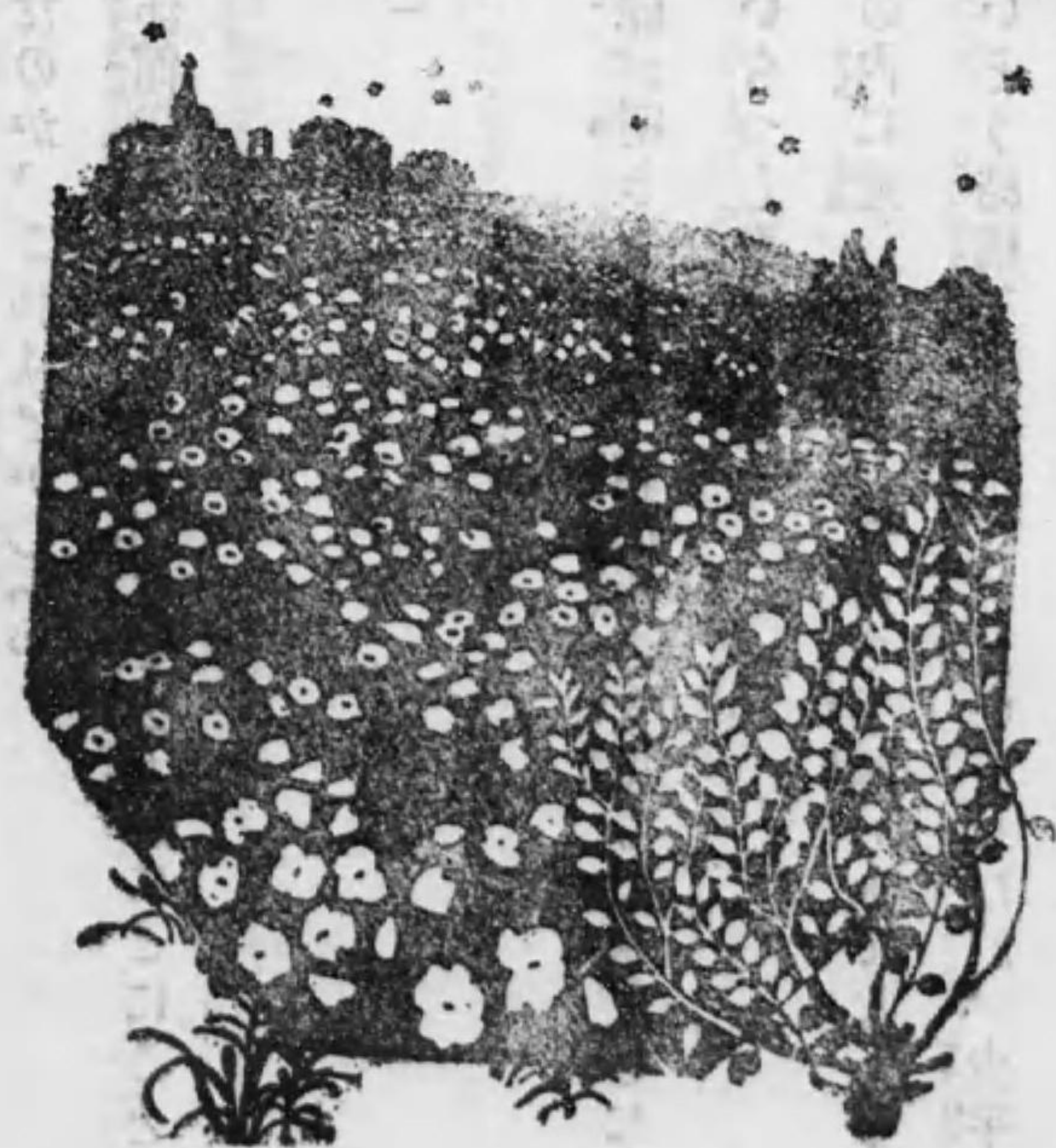
「鍵がございましたか」

「いゝえ」

「見つからなくつても扉が明きました、朝御飯の支度も出来ましたから、どうかこちらへいらつしやいませ」

と懇に少年を洋館の内に通しますと、やがて手厚いもてなしを致しました。それはたいそう結構な御馳走でございましたが、少年

にはそのあひだも、夢  
のことが氣にかゝつて  
たまりません、そこで  
食事がすみますと、直  
ぐに馬にむち打つて、  
自分の家の方へと急ぎ  
かへりました。



熊 少年 年

あ

る森の中に熊を父に持った熊吉といふ少年がありました。

食べる物は木の實草の實、着物は木の皮、友だちも獸や鳥ばかりですが、だんだん大きく物心がついて來ますと、人の中へ出てたいてたまりません。そこである日父さん熊にそのことをいつてせがみますと、父さん熊はいひました。

「いやまてまて、人間といふ奴は皆油斷のならぬ奴だからな、お前

はもつと力をつけなければいつちやいけない、そら御覽、むかうの  
榎の樹、あれを根つこから引き抜くくらゐにならなくちやいけない  
よ」

それは一抱へもある大きな樹でした、熊吉は行つてつかまつて揺  
ぶつて見ましたがなかなか抜けさうにもありません。

そこで熊吉は「此樹を一度に持つて引き抜けたら森を出して下さ  
い」と約束をいたしました。

熊吉は毎日腕を鍛へた甲斐あつてとうとう榎の木が引き抜けるや  
うになりました。父さん熊は熊吉が一息に大きな榎の樹を引抜くの

を見ろとたいへんに喜び、

「よしよし、それだけ出来りや大丈夫だ、森を出かけても宜しいよ、  
行く時にはこの樹の枝を取つて棒を造り、それを持つておいで」と  
いひました。

熊吉は喜び勇んで、森を出かけました。

森を越え野を越えて村近くまでゆきますと、お腹が空いて來まし  
た。幸ひその邊の畑に百人ばかりの百姓が耕してをりましたから熊  
吉はすぐいつて「食物を持たないか」といひました。すると百姓の  
頭がそれをきいて、

「ちや待つといで、今俺達の晝飯を搬んで来るから一人前位は分けてやらう」といひますと熊吉は「一人前？それ位ちや仕様がないなア」といひました。

「ちやお前は何人前位食べたいのか」

「百人前！」

「冗談ぢやない。百人前なら俺達みんなの辨當だぜ」

「それをみんな貰つたら少しは凌げるでせう」

百姓たちは大きな法螺を吹く子だといつて嗤ひました。熊吉は、

「それちや若し百人前みんな喰つたらどうするか」といひますと、

百姓たちは、

「その時は俺等の持つてをる犁をみんなお前に渡してしまふよ」と答へました。

「よし、それちや確かに賭けたよ」といつてゐますと、そこへ百人分のお辨當が馬や驢馬に積んで來ました。

熊吉はその荷を下すのを待つてムシヤムシヤと食べ始めました。そして見る見る食べて、百人前をすつかり一人で食べてしまひました。

それを見た百姓たちは眼を見はり、口を開いて驚きました。そし

て早速約束通りめいめいの犁を熊吉の前に投げ出しましたので、熊吉はそれを掻き蒐めると、森から白樺を一本抜いて来て、紐のやうにして犁を結び、それを柵の棒の先端に引懸けると、

「どうも有難う」といひ残してドシンドシンと出かけました。

間もなく熊吉は村端の鍛冶屋へゆきました、そこで百挺の犁の束を出して、「丈夫な一本の金棒を造つて貰ひたい」といひました。

鍛冶屋は引受けて直ちに金棒を造りましたが、根が横着物の鍛冶屋でしたから、受取つた百挺の犁を半分だけ胡麗化して取り、残りの鐵であんまり丈夫でもない品を造つて渡しました。

熊吉はそれを受け取ると、

「僕の註文通り丈夫かな」といひましたが、鍛冶屋は、

「丈夫ですとも、鬼の金棒よりはもつと丈夫でさア」と答へました。

「さうか、それちや試して見るぜ」といふかと思つて見ると熊吉はその金棒を取つて空へヒューツと投げ上げました。風を切つて飛んだ金棒は忽ち雲に匿れる位高く上りましたが、やがて落ちて来ますのを、熊吉は肩を突き出して「やッ」と受け止めようと致します。處が落ちて来たその金棒は熊吉の肩に当たるとボンと碎けて、破片が八方



に飛び散り、仕事場を滅茶々に毀しました。

狡い鍛冶屋もその破片に當つて一思ひに死んでしまひました。

それを見た熊吉はブルブル憤り、「ほんとに狡い人間だ」といひながら、散らばつた鐵の破片を拾ひ蒐めて、ドシンドシンと出かけました。

間もなくまた一軒の鍛冶屋に來ました。熊吉は鐵の破片を渡すと、同じやうに金棒を造ることを頼みました。

幸い今度の鍛冶屋は正直者でその上腕のさいた男でしたから直ちに丈夫な金棒を造り上げました。熊吉は受取るとまた空へ投り上げ

ましたが、雲の上までのぼつた金棒が熊吉の背中へ落ちて來ると、ガアンと鳴つて跳ねかへりましたがビクともしません。熊吉はそれを見るとたいへんに喜び、鍛冶屋に厚くお禮をいつてその金棒を擔ぎながらドシンドシンと出かけました。

暫らく行きますと野中の一軒家から女の泣き聲がきこえます。熊吉は不思議になつて覗きますと、美しい娘が年のよつた父親の膝に縋つて泣き崩れてをるのですから、どうした譯でそんなに泣くのか、と尋ねますと、父親のいふには、

「この頃この森の奥から大男が出て來て悪戯をするには困ります。

今もこの娘が向うへ行くとその大男が樹の蔭に晝寢をしてゐたさうですが、眼が醒めると此處へやつて來ていろんな難題を持ち出すだらう、といつて泣いてをるのです。

熊吉少年はそれを聴くと氣の毒に思ひ、出來るならその大男を追つばらふか、さもなければ殺してやらう、といひました。父子はそれをきくとたいへんに喜び、娘が立つてすぐ大男の寢てをる處まで案内いたしました。

行くと大男は大きな巖を枕にして森の樹がゆさゆさ揺れるやうな高軒をかいて寢て居りました。

熊吉はそれを見ると傍へ寄り、持つた金棒を振り上げその大男の頭に打ち下しました。

處がガアンと打たれて大男は、やつと斬は止まつたが、

「ムニヤムニヤ」といひながら片手を頭へのばして蠅でも拂ふやうな手つきをします。

熊吉は續いて金棒を打ち落しました。すると大男はまた同じやうに拂ひますので、熊吉は一層力をこめて三度目の金棒を喰はせようと、大男はやつと眼をこすり、頭をもたげましたが、そこに熊吉が立つてをるのを見ますと、クワツとおこり、「蜂でも刺したかと思へ

や、この小僧か、生意氣な！」といひさま立ち上りました。

熊吉はその勢ひに思はず驚いて逃げ出しますと大男は後から追かけて來ます。

然し幸ひ熊吉の足が速いので、だんだん大男から遠のきました。が、その中に廣い河に出ました。深くてちよいと渡ることが出来ません。うろろしてをると、それを傍の畑で薯の穴を掘つてゐた百姓が見ました。

「向う岸へ渡りたいのか」といひます。

「ええ早く渡りたいんですが……」と答へますと、

「それぢやこのシャベルの上にお乗り、向うまで投げて上げよう」といつて大きなシャベルを出しました。熊吉はいはれる通りそのシャベルに乗りますと百姓はヒュツとばかり熊吉を投つて川の向岸まで届けてくれました。

熊吉は喜んでお禮をいひながらまた逃げ出しました。

すると今度は小山があつて、熊吉がその上まで登る中にもう大男は山の下までやつて來ました。

「駄目だ！　とうとうつかまるかなア」

と熊吉は思はず山の上で立ち止まりますと、すぐ傍の畑に種子を蒔

いてをる百姓のお爺が、ありましたがきいて、「大男に追かけられたのか」とたづねます。

「さうです、おちさん何處か匿れる處がないかねえ」といひますと、

「ちや此處へおはいり」といつて持つて居た種子の袋をさし出しました。そこで熊吉は喜んでその袋の中へ跳び込みました。

やがて大男は小山の上まで來ましたが、熊吉が見つかりません。

「おいお爺、こゝへ子供が逃げて來なかつたかな」とたづねますと、種子蒔きお爺は、

「子供なら餘程前に通つて行つたよ、もう隣國ぐらゐへは行つてゐるかも知れないよ」と答へました、

大男は聴くとがっかりして歸りました。

熊吉はやつと大男から遁れる事が出來ました、そこで袋から出ようとしては、お爺はもう忘れてしまつたと見えて出してくれません、といつて一人て出ることも出來ません。

處がこの種子蒔きお爺には蒔きながら種子を食べる癖がありました。それで熊吉が出ようとしてゐます中に、不意に袋の中へ入つて來たお爺の手が、種子と一緒に熊吉を掴みますと、その儘お爺の口

へ投げ込みました。

熊吉は愕きました。跳び出さうとします中に、もうお爺がもぐもぐ噛み始めます。「これは大へん」と熊吉は舌の上から轉がり落ちました、そこに齒の一本が缺けてゐましたので、急いでその缺け目に逃げ込み、やつと噛み潰されずにすみしました。

その晩このお爺が家へかへると、娘を呼んで、「齒に何か填まつて氣持ちが悪いから、爪揚子を持つておいで」といひました、娘がつて來た揚子は熊吉の擔いでゐた金棒を十本も集めたやうな大きな棒でしたから、熊吉はそれで突付かれてびつくりして跳び出します

と、やつと外へ出る事ができました。お爺は見ると、

「ははアお前だつたか、すつかり忘れてゐただよ」

といつて笑ひました。

そこで熊吉は、このお爺の家の者となつて修業いたしましたので、おしまひには、世界一の力持ちとなりましたとさ。



## 濱の火事

サ

ラサラーツ ドシヤリ!

サラサラーツ ドシヤリ!

濱風がヒユヒユと淋しい音を立て居る松林の前の藁葺の小  
さな家には、腰の立たない婆さんが獨りぼつちで住まつて居りまし  
た。婆さんには子も孫もありませんでした、又お金を持つて居るで  
もないのに病氣の床に就いてからこれで五箇年、今に癒えもしない

が重くもならず、毎日村から代り代り世話に来て呉れる子供達の力  
で、その日その日を送つて居るのでした。

深切なのは濱の村の子供達です。朝學校へ行くといつては小屋の  
外から聲をかけ、又歸つて来れば當番をきめて婆さんの食事や身體  
の世話をいたします。濱の引網に甘さうな魚が獲れた時などは、

「そのもちひさなのを一尾婆さんに持つて行つて上げようぢやないか」  
といふ風に、誰も彼れも婆さんをおもひやり、いろいろ慰めに行く  
のが常となつて居りました。

すると婆さんは又子供達が寄ると大悦びで、むかし自分が西國へ

巡禮をした時の物語りや子供達が生れぬ前にこの村にあつた出来事など面白い話や悲しい話をして聞かせますので、子供達も大悦び「今日は相撲も厭きたし、砂いちりもつまらないし、さうだ濱の婆さん處で又面白い話でも聞かうぢやないか」といつては寄つてくるのでありました。

ある日の事です、村の子供達は婆さんから「天竺徳兵衛」といふ剛氣な子供の話を聞きました、その歸りに濱へ出ると波打ち際には近頃造られた新しい小舟が繋いであります。

「やア小さな舟だなア誰かこれに乗つた者が居るのかえ」

「まだ誰も乗らないだらうよ、これや僕ん處の網場の舟だもの」

「乗りたいなア」

「さうだ天竺徳兵衛見たいにねえ」

「のらうか、沖には鯖釣船が出て居るんだから、彼處まで漕いで見ようか」

「賛成賛成」と早速話が纏まつて、小さな五人が中に入り、年長な二人の少年が櫓を押してワイ〜騒ぎ乍ら漕ぎ出しました

舟は新しく海は風ぎて居ます、其上漕ぎ手は元氣の好い濱の子供で氣合がしつくり合ふものですから舟足は這るやうに走りました、

濱の婆さんは小屋の窓からニコニコし乍らその態を眺めて居りました。やがて子供達の乗った舟は次第に小さく遠く進んで、はてはボツチリ點のやうになつた時、婆さんはフイと空を見揚げました。これは大變！西の方からただただぬ雲色、墨を流した様な夕立雲が濕つぽい風と一しよに次第に沖へ進みます。

「しまつた、これは暴風雨になるぞ！、どうしたものだらう、可哀さうにあの子供達はこの雲に氣が付かずに漕いで居るに違ひない、うつちやつておけばどんな目に遇ふか知れないが呼んでも聲が届かず、村へ知らせるにも足が立たない……どうしたものだらう」と婆

さんは周章しました。體を起さうとしましたが今はもう病の身のそれすらかなひませぬ。

「こまつた、どうすればよからう」とがつくり首肯れましたが、この時婆さんの目に映つたのは枕元にあつたマッチ箱でした。

「そうだこれだ！これであの可愛い子供達を助けるのだ」と婆さんは甦へつた様にいつてそのマッチ箱を取り上げました。

船を漕いでゐる子供達は、後の空に夕立雲を見ないではありませんでした、然しそれがやがて暴風雨となるとは氣が付きませんから



一向平氣で軍歌など歌ひ乍ら漕いでゐますと、その中の一人が不意に濱の松林の蔭、丁度濱の婆さんの家あたりから眞黒な烟が立ちのぼるのを見付けました。

「やア火事だ火事だ」

「濱の婆さんの家ぢやないか」

「さうだ、婆さんの家だ」

「たいへんたいへん、早く行つて助け出さねば婆さんが死んで仕舞ふぞ！」と大騒ぎで小船を引返へし二本の櫓に四人も五人もつかまつて、ヤツシヤツシ、と漕ぎ出しました、然し目の前にすぐ小屋の

燃えてゐるのを見ながら進むのですから、子供達に取つてはその船足ののろいこと、おそいこと。

「オイ早くやらう」

「しつかり漕がないか」と必死に漕いでゆきましたが、濱へ着いた頃には、残念にもあの深切な、子供達の大切な婆さんの家はすつかり燃えてしまつて居ました。

「お婆さんア」

「何處だ何處だ」

「どうして火事なんか出したんだえ」と呼びながら火事場へ駆けつ

けますと、其處には足腰立たぬ婆さんは腰から下は大火傷、眼も當てられぬ状態となつて打ち倒れて居りました。子供達はそのぐるりに駆け寄つて、

「お婆さん、しつかりしろよ、しつかりしろよ」

「僕達が来たからしつかりしろよ！」とワイ／＼いつて呼びました、するともう顔色の變つた婆さんは僅かに眼を開きましたが、

「オ、村の子供達か、暴風雨にあはなくつてよかつたのう」とさも安心した様にいつたかと思ふとその儘息が切れて仕舞ひました。子供達は泣いて婆さんの死骸を吊ひましたが、そのうちに起つた大

風大雨、この大  
暴雨に、若し  
この婆さんの家  
の火事がなかつ  
たらば、七人の  
子供達は沖でど  
んな目にあつた  
ことでありませ  
う。



## 石に成る山

父

さまから御用をいひつかつて、ひとりて遠い國へ旅をする少年がありました。

ある日妙な形の山の麓までまわりますと、俄にその山に登りたくなりしました。するとそこへ一人の羊飼ひが来ていひますには、

「あの山にのぼるものはみな石になつてしまふのです、山の上で小鳥を抱いてをる婆さんは、誰れでも見たらばすぐ石にしてしまふか

らねえ」と。

それを聞いた旅の少年の眼は輝きました。

「へんな婆さんがあるんだねえ、してその抱いて居る小鳥といふのは、どんな鳥なの？」

「それはそれは優しい可愛い小鳥ですよ、青い羽根であかい嘴で、だつてそれはもとはこの國の殿様のお姫様だつたんですもの」

「お姫様が小鳥になつたの？」

「さうです、婆さんの魔法の力でなつたのです。ほんとに誰か早くのぼつて、あの婆さんの灰色の長い髪をつかんで、小鳥を助けてや

るものがないかなア」

「灰色の髪をつかめつて？」

「さうです、その髪さへつかめば婆さんは死ぬのですつて……」

「よし、ちや僕が行つて助けようや」

と少年はいひました。

「油断をして石におなりなさるなよ」

と羊飼ひが氣づかひました。

「大丈夫だよ」と少年は勇んで山へ登りました。

少年の登る阪路にはいくつも大理石の柱が立つてゐました、それは山の婆さんから石にされた人達でした。

少年が山の上まで行きますと、その天邊に魔法使ひの婆さんが、寝ころんで青い小鳥と遊んでをりました。

少年は「今こそ」とおもひましたが、じいつと氣をしづめ、足音をしのばせて近寄りました。幸に婆さんは後向きになつてゐましたので、少年の近づくのに氣がつかせませんでした。少年は愈近づくど躍りかゝつて婆さんの長い髪を掴みました。すると婆さんはキヤツといつて跳ね起きようとしませんが、起きる

ことが出来ません、じたばたしますその音は山をグワラグワラ揺がしてまるで大地震でも起つたやうです。やつとそれが止みますと、婆さんは髪をつかまれながら少年の顔を見あげて、

「恐ろしい力の子だ、何故私をいちめるのぢや」

「そのお前の抱いてをる小鳥を放しておやり、それがならねばいつまでもこの髪は放さぬぞ」と少年はいひました。婆さんはかなしうに、

「それぢやもう仕様がな、放してやらう」といつて、青い小鳥を少年に渡しました。

すると不思議やその小鳥は婆さんの手をはなれると、忽ちきれいなお姫様とかはりました。

「有難うございます、おかげで助かりました」

「はやくお逃げなさい」

お姫様はいそいで麓へかけくだり、そこから羊飼ひにおくられてお父様のお城まで逃げかへりました。

山の上には、少年はお姫様のお城から多勢の兵隊がこの山の上へ押し寄せて来るまで、しつかりと婆さんの髪を掴んでゐましたが、もうその時にはこの婆さんはすつかり石に化つてしまひました。

その婆さんの化つたお化石を兵隊に擔がせて、勇んでお城へ引き揚  
げましたが、それからこの少年は殿様のお子様になつて、いつまで  
もお姫様と一しよに暮すやうになりましたとさ。



### 山男と鬼鳥

**山** 山がまだ朝の霧につつまれてをる頃でありました。一人の若い王子は裕間の逕を馬をうたせてのばりました。

大きな岩の扉の立つた洞穴の前までつきますと、王子は馬から飛び下りてその扉をトントンと叩きました。

「御免、御免」

呼んでも答へはありません。たゞその中からグーグーと獣の唸り

聲のやうな高射がきこえるばかりです。氣の短い王子はこらえかねて足でトントンと扉を蹴りました、するとやつと射が止んで中から扉があきました。

「ウウウウーム朝ツばらから騒々しいぞ、誰だい、やつて来たものは誰だい」

といひながら、洞穴の前にヌトツと立つたのは、高さが五丈ばかり電信柱よりももつと高い山男でありました。

王子はその山男の顔を見あげて、大威張で申しました。

「こら山男、一たい貴様は私を誰だとおもふか？」

ところが何分王子の口と山男の耳とは四丈五尺もへだたつてをりますから、耳の遠い山男にその聲の聞こえやうがありません、そこで山男は、一挺の長い梯子をもちだして、それを自分の肩の處までたてかけ、

「さあ云うことがあるのなら、これを登つて来ておいひなさい」

といひました。そこで王子はその梯子を山男の肩まで登りますと、丁度その耳に自分の口がとゞきましたので、やつと、

「山男、私はこの隣國の王子だよ」かう申しました、すると山男は大きな眼を白黒させて驚きました。

「ヘーッこれはまことに恐れ入りました」とあわて、お辭儀をしようとしますと、そのはずみに王子は轉げさうになりましたので急いで山男の肩にしがみつきの、

「コレコレあぶない、山男、そんなお辭儀をされちや私がおつこちてしまうちやないか」

「へいへい」

「實は私はこの隣國の王子ちや、残念なことには今度私の城を伯父上に取りられたのだ」

「へーい、それはまたどうした譯でございます」

「それは私の父が亡くなると、いけない伯父上の悪謀でとうとう私の住むべき城を取られてしまつたのちや」

「それはお氣の毒な事でござりますなア」

と山男は太い嵐の様な吐息をついて申しました。

「ついては山男、實はお前に頼みがあつて來たのちやが」

「その頼みと仰しやいますと……」

「あの悪い伯父上を油の鍋で煮てくれまいか、そして伯父方の悪い家來供を片つばしから踏みつぶしてはくれまいか、その上國中をお前が歩き廻つて、若し伯父上に味方をする様ないけない人間があつ



たらそれらのものをのこらず踏みつぶしてもらひたいのぢや、もしそれができると私は直きにあの立派な城を取りかへすことが出来るからな、その時にはお前にも十分の褒美を取らせるぞ」と申しますと、大男はすぐ肯いて、

「宜しうございますとも、承知いたしました、ぢやこれからその伯父御をすぐこらしめてやりませう」と譯もなく請け合つてしまひました。これは山男のいつもの癖であります。

すると王子は大へんに喜んで、

「きいて呉れるか、有難う、ぢやこれからすぐ私の國へ行つて貰ひ

たい」

「畏まりました。だが貴方と御一緒では、とてもものろくつてやりきれません。アツさうだ少し高いが、王子様あなたは私の帽子の上にお乗りなさい、それからお馬は懐へ入れて行きませう、それから梯子を腰にさして、と辨當を持つて……よし来た、さア出かけませう。はいはいこれから右向け前へですか」

と山男は獨り合點をして、大きな脚で一またぎ十間づゝノソリノソリと歩き出しました。

その日は幸ひよい天気でした。王子は大船にのつた氣持で帽子の

上からあたりの景色を見物しながら歩きましたが、一日歩き続けて夕ぐれ近くなりますと、山男の方では少しヘンな氣持ちになりました。

それは今朝程王子とあんなに譯もなく約束をしたが、考へて見ればこの人の伯父様だとして、又その伯父様方の家來だとして、自分に取つては罪も咎もない人達、それを油で煮殺したり、足で踏みつぶしたりそんなむごたらしいことがどうして出来よう。いやなこつた。

……だがさてよ、一度約束をしてここまで一所に來たからにはすぐ斷るのも氣の毒だなあ。などとそれからそれへと考へ出すと、だん

だん歩みも遅くなりました。やがて王子の國の入口にある大きな森まで着きますと、日はトツブリと暮れてしまひました。

「王子様ここで泊りませう」

「うむ、よし、ちや下してもらひたい」

王子と山男とは森の中ほどのところで野宿をすることにきめ、お辨當をたべはじめました。山男はどうも考へれば考へるほど心配になつて、御飯もろくに咽喉を通りません。そこで、

「王子様、私はもうお約束のことは御免蒙ります。私にとつては何の罪もない人達をそんなにいちめることはとても出来ませんから、

へー王子様の折角のお頼みではございますが、どうか私を此處から  
歸さして下さい」

と申しました。

王子はまいて驚きました。

「山男、お前は今になつてそんなことを云つてくれば困るぢやな  
いか、もしお前は私との約束を破つて御覽、今度お前は世間の人か  
らさらはれ者となつてしまふぜ。まアいろんな餘計なことを考へず  
に、ぐつすり寝て疲れをやすめた方がよいぞ」といふと、  
と無理矢理に山男を寝かせました。

が山男は王子からどんなにいはれても人を殺すことがいやだ、と思  
ひますと、どうしても眠りつくことが出来ません。とうとう夜中に  
そつと起きて、王子の傍から逃げ出しました。

山男は大きな脚でピョンピョン逃げてゆきますから直きに森を離  
れましたが、さて考へて見るに王子は自分が逃げたと知つたなら、  
屹度後から追つかけて来るに違ひない、その時までこの大きな體で  
のそくしてゐたら、どこへ逃げてみすぐにもみつかつてひどい目に  
あふだらう、これはどうかして自分の姿を匿さなければならぬ。さ

でどうしたらよからう。と思ふ時ふと考へついたのはかねて親しい仲の百合姫のことでした。へ、と考へて見ると、さういふ目には、  
「あの姫は體はちひさいが智慧のあるひとだから、一つあの百合姫に頼んで見よう」  
と斯う思ひました。すると折から霧の奥から面白さうに琵琶の音がきこえて來ますので、

「さうだ、あの琵琶の音が、その姫が弾くのに違ひない」

と山男はその音をたよつて行きました。崖の巖陰までゆきますと、百合姫は團栗の殻に蜘蛛の絲をかけた

小さな琵琶を弾きながら節面白くうたつてをりましたが、山男の姿を見くと、

「山男さんはとうとう馬鹿な目にあひましたねえ」

と笑ひながら申します、山男は驚いて、

「では姫はもうあの事を知つてゐるのですか」

とたづねますと、

「知らなくつてどうしませう。お前さんはどうもお人好しでいけませんよ。物事は考へ無して何でも約束をするものぢやないつて、ふだんよくいふのに、ぼんやりしてゐるからつひそんなことになるの

です、王子様との約束も守らなければなるまいし、さうかといつて  
自分に思も恨みもない人達を無闇に殺すことも出来ないといふので  
せう？」

「さうです、さうです、全くです」

「それなら體を匿した方が宜しいでせうよ。お前様がゐなければ、  
王子様が叔父上を殺すことも出来まいし、また叔父上がその中に心  
を改めて城を王子にかへすことになるかも知れないもの」

「ところが姫よ、どこへ逃げようにもこの大きな體では匿れ場所が  
ないぢやありませんか」

「それもさうねえ」

と暫らく考へてゐました百合姫は、

「あ、ぢや、かうしたらいゝわ、お前様少し不自由でも、私がお前  
様の體を幾つかに分けてあげるからね。さうしてはなればなれにな  
つて逃げたらわかりつこはないでせう」

「體をわける？痛くはないでせうか」

「ちつとも痛くはありません」

「それぢやどうかそのやうにして下さい」

そこで百合姫は持つてゐた黄金の撥を山男の胸のところへあげて

一人二人三人四人、五人、六人、七人、八人と呼びながら八度左右に切る真似をして、やがてボンと一つ胸の真中を打ちますと、これは不思議、大きな山男の體が忽ち積木の崩れるやうにバラ／＼に崩れました、と見る中に、あたりまへの人が八人、それも今迄の山男と少しも違はぬ姿でちやんと立つてならんでをりました。

「やあ、變だねえ」

「をかしいなア」

とその小さな八人の山男はみな見合せながら申しますので、百合姫はおもしろさうに笑ひながら、

「それでよいでせう。ちや早くお逃げなさい。そして若しもとの體になりたくなつたら、八人揃つて、一しよに六根清浄々と三度唱へなさい、すぐ元の體になりますよ」

といひましたので、小さな山男達は一齊に、

「どうも有り難うございました」とお辭儀をしながら蜘蛛の兒をちらす様に逃げ出しました。

けれども根が一つの體がわかれたのですから、ついお互に戀しくなると見えます、ものゝ三里と逃げない内にいつか八人が寄り合ひまして揃つて旅をすることゝしました。すると八人の小さい山男は

何處へ行つても「不思議によく似た兄弟だ、おもしろい人達だ」といはれて喜び迎へられ、何不自由なく旅を続けました。

話がかはつてこちらは王子です、山男に約束に反かれて伯父上を討つこともちよいと出来なくなり、今まで自分の味方をしてゐた多勢の家來たちも一人去り二人去り、皆伯父上の方についてしまひましたので、はては王子は獨りぼつちとなり、その日の生活にも困る様になりました。

そこでとても此國にあることは出来なくなりましたので、馬や鎧

をお金にかへ、僅かな路銀をつくり、はうはうをさまよひあるさまにしたが、そのうちにある田舎へゆきますと生れてすぐ里子にやられた自分の妹にめぐり會ひました。妹は品子姫といつて、今では養家の一人娘となり何不自由なく暮らしてをりよしたが、おちぶれた王子の姿を見ますと非常に驚いて、早速その家でお世話をすることにいたしました。

王子は幸ひに妹のために漸く體が落ちつきました、そこで今までの伯父上を恨む心も失せ、又山男を捜し出す考へもなくなつて、品子と一緒に當りまへの田舎の人になり、毎日田を作つたり馬を曳い

たりして働いてゐました。

ところがある日大變なことが起りました。それは山の畑へ一人て桑を摘みに行つてゐた品子が、夕方になつても夜になつても歸つて來ません、親達は驚いて王子ははうばう人を雇つて捜させました。

やがて山へ捜しに行つて歸つて來た村の爺やが今朝程山の方で恐ろしい羽音と女のけたゝましい泣きごゑをきいた者があるといつげました。そしてその爺やのいひますには、

「もしや鬼神山の奥の崖の上に昔から巢をくつてをる鬼鳥ではござ

いますまいか、あの鳥なら、時々人間をさらつてゆきますから……」

「えいッ！その鬼鳥とやらが品子をさらつたといふのですか」

と氣ばやの王子はすぐにも飛び出さうとしますと、父親はあわてゝ止めて、

「鬼鳥であらう、鬼鳥ならなかなか人間の手に討たれるものぢやない、昔からあの鳥に向つて弓をひいたり、鐵砲を射つたりした者は即座に死んでしまふのだ、あれはどうしても山男の力でなければ退治られぬものぢやからかう」

「お父さん、山男の力ですか……」



王子は思ひついたやうにかう叫びました。

「さうちや山男の力なら鬼鳥を殺すことが出来るのぢや」

「えいッ！残念だなア。山男なら私が一度連れ出したことがありません」

と王子は深いためいきを洩らしました。がまた思ひ返して、

「だつてお父さん、僕はどうしても鬼鳥を退治ます、品子を救ひ出さずにおくことが出来ません、どうかしばらくの間お暇を下さい」といつてき、ませんので、父親も「それでは氣をつけて行くやうに……」と氣遣ひながらゆるしました。

王子は鬼鳥の棲むといふ鬼神山の麓までゆくと日が暮れました。

折懸くそこは大きな森となつてゐます、王子は途方にくれて、闇を手さぐりにあちこち歩きます中、遙かに灯影を見つけましたので、大よろこびで駆けつけました。見ると其處には八人の柚が薪火をして野宿をしてゐる處です。王子は元氣よく、

「御免！私は森に迷つたものです。鬼神山へはどちらへ行きますせう」とかう尋ねますと八人の柚は一齊に眼をみはりました。

それもその筈、この柚といふのはあの山男が分れた人達ですもの。

山男達は八人はなればなれの人間になつてをりましても、やはり以前の山男と同じやうに氣のよい、やさしい性質の人達でした。今王子が道に迷つてをる姿を見、その上滅多に人の登らぬ鬼神山へ行かうといふのを聞きますと、また屹度何か悲しみ事が出来たにちがひないと、考へましたので、深切にその譯をたづねました、そこで王子は鬼鳥に自分のたつた一人の妹をうばはれたことを告げました。

八人の山男はそれをきくと、すぐ鬼鳥を退治て、その妹の品子を取りかへして上げようと思ひました。が、もし自分たちが前に森

で王子においてけぼりを喰はした山男と知れては困る。又伯父上を油で煮てくれと頼まれては尙更困る、と斯うおもひましたので、

「お前さん、鬼鳥を退治るのなら私達が加勢して上げますがね……だがそれがすむとお前さんは又伯父さんを油で煮るなんて考へてはいけませんよ」

といひました。王子はそれを聞くと眼を圓くして、

「まアお前さん達はどうしてそんなことを知つてゐるのか……これは不思議だ……だがもう私は今は品子と一しよに百姓家の息子になつてしまつてゐるんだから、伯父さんのことなんか全く忘れてしま

つてゐるんです」

「それぢや宜いがね、それから山男を恨んで、出遇つたら虐めてやらうなんて考へてはいけませんよ」

「まアあの山男のことまで君達は知つてをるの。……私は山男を恨むどころぢやない。あの男にはまだ會つたらお禮をいひたい位です」

といひますと、八人の山男はうれしさうに笑ひました。

「よしよし、そんならこれからすぐに鬼鳥を退治てあげませう」

そこで夜の明けるのを待つて、山男達はぞろ／＼と王子の後から

鬼神山へむかひました。

そんなこととは知らぬ鬼鳥は攫つた品子を洞穴におしこめこれから一つゆつくりとたべようとしてゐるところへ、王子を先頭に山刀を持つた同じ扮装の八人の山男がぞろ／＼列をつくつて押しよせました、鬼鳥は見るとたいへんに驚き、忽ち爪を鋭いでたちむかひました。

「かゝれい」と王子が合圖をいたしますと、山男は暴れまはる鬼鳥をぐるりから攻め懸ります、どんなに強い鬼鳥も、山男に會つてはかなひません、ことにそれが八人も揃つて、ぐるり八方から攻めたて

ますので、何とでもして逃げのびようと立ち騒ぐ中に頭に翼に胸に脚に、八本の山刀を突き刺れたものですから、雷の様に泣きながら逃げ廻りましたが、とうとうねぢ伏せられてしまひました。その隙を見て王子は洞穴の中へ飛び入り、其處に人心地もなく打ち倒れてをりました妹品子を抱きおこして、首尾よく救ひ出すことが出来ました。

さて鬼鳥を射止めた山男達は、王子の妹をつれて出たうれしさうな姿を見ると互ひに顔を見合せ、

「どうだい、もう今では元の姿に變つてもいゝぞ」



「それがよからう」

「賛成々々」

といひますと八人向ひ合つて、一しよに手をうち、「六根清淨」と三度唱へました。すると八人の體がバラバラツと寄つてさつと立ちますと五丈もある大きな山男、屹驚する王子の容子をニコニコ笑つて見下しますと、

「は、王子様、もう前のお約束は取り消しにしても宜しいでせうわたしも安心して山へ歸れます。左様なら御機嫌よう」と言のこしてドシンドシンと山の洞穴へと歸りました。

千早の姫

山

櫻のはらはらと散る朧夜のことでありました。楠家の息女千

早姫は父上正成の敵をたづねて唯一人、河内の國よりはるばる海をわたり、四國は伊豫の松山近くまで差蒐りました。目指す敵の大森彦七の領地に次第に近づきましたので、人目を避けてとぼとぼと關路をたどりゆきました。

その時忽ちはるか阪の上より松明をともして何か語りながら来る

三四人の村の人がありました、その内には武士も交つてゐますので千早姫はびつくりしながら、程近い地藏堂に匿れて、これ等の人達を通り過ごさせようといたしました。

するとその村人達は地藏堂の前まで来て一息入れ、武士と立ちながら話をはじめます、千早姫は堂の中から、こはこはその話を聴きますと、この人達は、この國の殿様の細川公のお庭で、猿樂といふ舞ひの催しがあるに就て、この邊の土地の領主大森彦七もその猿樂の役者におなりになるので、それを拜見に行く途中である、といふことがわかりました。

それをきいて千早姫の胸はをどりました。「さうだ、彦七が猿樂に行くには屹度この道筋を通るにちがひない、これこそ願つてもない好い機である、この御堂に彦七の來るのを待ち合せて父の仇を討つこと、しよう」と斯う考へました。

そこで村人が去つた後で姫はいろ／＼と彦七に立ち向ふ方法について考へました。するうちに千早姫はその地藏堂の鳴居に、恐ろしげな鬼の面の額が懸つてあるのを見つけました。

「さうだ、この面を被つてまつてゐよう」と、すぐ取りはづしてそれに紐をつけ、それをかぶられるやうにして袂にかくし、そのまゝ、

地藏堂の椽に出て柱に凭れかゝつてまつてゐました。

すると間もなくこの地藏堂の前へ家來をつれた武士が來蒐りました、それは彦七ではなくて、松山在に住む道後左衛門でありました。

左衛門は千早姫の姿を見咎めて、身元を問ひたゞしましたから、千早姫は「私は播磨のものでござりますが、兩親が亡くなりましたので、回向のために高野山へ願をかけ、それから四國巡禮をしてこの地までまゐりました」と答へました。

然し左衛門は姫の身装を見ても、四國巡禮とは信じられません、都すまゐるを長くした宮使でなければならぬ、その證據には言葉にも

京説りがあらはれてをる、さういへばこの頃朝廷が南北兩方にわかれて、そのため五畿内にも北陸道にも戦争の最中である、この四國だとてこの邊こそ北朝で治まつてをるとはいふものの、外に南朝方がないとも限らぬ、或はこの姫は、南朝方の新田か楠かの差圖をうけて入り込み、この領内の様子を窺はうとする忍びの者ではあるまいかと考へましたので、すぐこの姫を召つれて殿様の檢斷所へつれてゆき、詮議をしようといはしました。千早姫はたいへんに困りました、折角こゝまで來て、それももう暫らくまでは當の敵にも遇へようと思つてをる矢先に、この武士に召捕られるとは今までの苦

しんした骨折もみな水の泡となる、あゝ、なんとした残念なことであらう、と思ふと全く途方にくれてしまひました。

すると折も折、千早姫がも少しで左衛門の家來に縛られようとしてゐますと、そこへ當の敵大森彦七が馬をうたせて通りかゝりました。

左衛門は大森の來たのに驚きました、千早姫は一層びつくりいたしました。が彦七は千早姫が自分をつけねらつて來た楠公の息女だとはゆめにも知りません、いづれこの姫は仔細があつて旅をするものであらうに、性質のよくない左衛門に引立てられるとはまことに

不愼なことである、とさう思ひますと、早速二人の仲に入り、

「左衛門殿、この姫はわしが存じて居る方だ、これは住吉神社の神主の娘で知合ひの仲であるが、すべてはわしに任せて貰ひたい」とその場をうまくつくろつて、姫を救ひ、左衛門を立ち去らせることにいたしました。

この様にして千早姫は、彦七に災難から救はれたのであります。そこであたりまへならば左衛門が立ち去つた跡で、彦七にお禮を述べ、今までの一分始終をうち明けも致しませうが、しかし姫にはそれが出來ません。なぜといふに、彦七は父上の憎い敵であります。



自分の父を亡きものにしたといふ敵、家の仇、自分の弟の正行や正儀に代つても是非首を取り、豫て父から奪ひ取つた楠家の寶物の菊水の名刀を取り返さなければならぬ人ですから、姫はどうかして隙をねらつて彦七を刺し殺さうとあせりました。

そこで彦七が姫にこれからどちらへ行くのかとたづねますと、千早姫は、

「そなたと同じく殿様の猿樂を拜見にまわりますからどうかお供をさせて下されませ」と申しました。

「さうですが、それでは一緒に行きませう」

彦七は魂の太い、應揚な武士であります、千早姫のことはを信じて、快く道連れとなりました。

さて彦七の家來の一人が松明を持つて先に立ち、次ぎに千早姫、その後から猿樂の衣裳の入つた櫃を荷つた二人の家來がついて山路をだんだんと登つてゆきました。

すると路は溪川の流れに出ました、不斷は川底が浅く、岩を跳び跳びに渡るやうになつてゐますが、今夜は雨の後とて水嵩が増して、女足にはすこし足元が危く見えます。彦七は見かねて千早姫をおぶつて渡らうといひました、姫は「勿體ない」といつて一度は辭退いた

しましたが、二度目にすゝめられるまゝ、彦七の背におぶさりました。

その時千早姫は、

「隙は今だ」とおもひました。

折柄嵐がどつと吹きおろします、姫はすつくと身をおこしますと忽ちさき程地藏堂で袂にかくしましたあの鬼の面を取り出し、それをかぶり、懐剣をひき抜いて彦七に斬つてかゝりました。

それと見た三人の家來はびつくりいたしました。松明や櫃はそこへ投げ出して逃げ出しましたが、彦七はさすがに人の上に立つ大將です、ひらりと身をかはしますと、持つてゐた扇で姫の懐剣をハッ

タと受け止め、

「おのれ曲者！」

と睨みつけました。

すると姫はひらりと身をかはして川岸に跳び下り、身構へをして申しますには、

「父上の敵、また寶劍を奪ひ取つた盗人の彦七、そこ動くな、勝負をせよ」

女ながらも楠公の息女です、男にまさる武術のたしなみがありますから、あつちへ離れ、こつちへ跳び込んで彦七の隙を見ては討つ

てかゝります、その手並の鋭いこと、彦七も最初はたちまちする位  
でした。しかし持った扇でうけ答へて烈しく闘ひつゝいますうち、  
とうとう女の力がかなはず、彦七は姫を組みしひてしまひました。

「さアさア何者か早く名乗れよ、自分を父の仇だの、盗人だのと汚  
らばしい名をつけて欺し討ちをするとは卑怯なこと、すなほに名乗  
りをあげよ、仔細を語らぬか」

と彦七はせめつけますと、姫はもうこれまで、と思ひましたか、

「もうかうなつては名を申すまでもない、はやう私の首をお取り、  
早うお取り」と申します。

「よし、そのやうにいふなら強ひてはきくまい」

と彦七は手をゆるめて姫のかぶつてある面を取り、折柄雲間をもち  
た月あかりに照らしてその顔を見ますと、それはどうも楠判官正  
成公にそっくりいさうししの顔ではありませんか。

「さうだ、わかつたぞ、そなたは楠公の息女ぢや、それに相違ない  
若し仔細をおのべにならなければ、この場に繩を打つて、都へひき  
たて、恥をさらさせませうぞ」

これにはさすがの千早姫も匿しきれなくなりました。そこで仕様が  
がなく、いかにもいはれる通り私は正成の娘でございます、そな

たは去年の五月、あの湊川の合戦に、わが父上正成に詰腹を切らせた上に、楠家の寶の菊水の寶劍を奪ひ取つた人ですから、是非恨みを晴らさうとして此處までまゐつたものでありますが、もうこの場に及んでは致し方もない、すなほにそなたの刃の露となりませう」と答へました。

彦七はこの姫の言葉にたいへん感じました。

「あつばれなお覺悟、男子にもまさつた御決心でござるぞよ」とほめた、へ、然し、姫の恨みは誤りである、彦七は決して正成公に詰腹を切らせたのではない、また寶劍も彦七が盗んだのではありませ

んと詳しく當時の模様を姫に語りました。

彦七の語るところによりますと、湊川の合戦に戦ひやぶれた正成はある百姓家で、弟の正季とさしちがつて自害しようとしてゐますと、そこへ彦七が行き合せました。

そこで彦七は正成の最後を全うさせようとの深切な心から、他の追ッ手をこの場へ寄せつけないように、と自分の家來達に、護らせたくらゐであります。それから寶劍のことも、正成がなくなつた後で、その冑や太刀と一しよに彦七の主人の尊氏の前へ出すと、尊氏はその寶劍を見て押し戴き、これは先の天皇から正成にお手づか

ら賜はつた恩賜の名刀であるによつて戦争の休むまでは、彦七が大切に預かつておくように、と斯ういはれたので、今も持つてをる、といふのでありました。

それを聴きました千早姫は、大へんに驚きました、そしていまさら、事の間違ひとはいへ、この彦七を父の仇だの、盗人だのおもひ込んだのは申し譯もないことであつた、と慙ぢ入つて、ひたあやまりにあやまりました。

それを見た彦七は、うよしよしそのやうに譯がわかつたらよろしい四國もこの地は南朝方の御敵地である、長くおいでになると、御身

の上が危いから、はやう河内へお歸りなされ」とすゝめました。

しかし千早姫にはこの場合、彦七のすゝめ通りに、河内の國へ歸ることが出来ませうか、いゝえそれは姫としてはどうしても出来な  
いこととあります。家を出ます時には母上とも弟達とも「若し敵も射止めず、寶劍も手に入れないでは、決して河内へは歸りません」と堅く誓つて出て來たのでありますから、今更譯がちがつたとどうしておめ／＼かへられませう、そこで姫は彦七にむかつて、  
「大森殿どうか私を不惑だとおぼし召したら、この場で殺して下され」といふのであります。

「それはとんでもない心得違ひだ、そのやうな淺はかな考へはもつてはなりません」と彦七が止めますと、

「もしあなたがお殺し下さらぬのなら、私は溪川の淵へ身を沈めてしまひませう」といひました。

「これは困つた」と彦七は途方にくれましたが、やがてはたと手を拍つて、

「よし、その様にいふたとて、私はそなたに命を捨てさするに忍びないから、改めて預かり物の菊水の寶劍をお譲り申さう」と腰の刀を抜いて姫に差出しました。

千早姫はいよいよ面喰ひました。

「お志はまことに嬉しうございます、が、後で若しやあなたが尊氏殿から寶劍についてお尋ねをお受けになつたら、その時の御迷惑は如何ばかりでありませう、折角のお情は忝なうぞんじますが、私は御身に御災難のふりかゝるのを知りながら、その寶劍をお受けすることは出来ませぬ」とかういつて辭退いたしました。

するとその時彦七はいひました。

「いや御辭退は尤もである、しかしそこには私に考へがある、先程

そなたがお用になつた鬼の面を、今一度そなたにかぶつて貰ふの  
ぢや、その上、それその家來が逃げた時に投つていつた櫃の中に  
は猿樂の時に着る唐織の法被もある、それをそなたがお着けになれ  
ばすつかり判官正成殿の怨みが凝つて鬼の姿、神變不思議の通力で  
この彦七を惱まして、寶劍を奪ひ取つていつたことにしたならちつ  
とも障りが御座るまい、さアさア早うその面をかぶり、法被を着け  
て、この寶劍をうばつておいでなさい」といひました。  
千早姫は彦七のおもひやりから考へ付いた頓智をきいてたいへん  
によるこびました。すぐにいはれる通りに鬼の姿を装つて寶劍を受



け取りますと、お禮の詞をくりかへしながら躍るやうにしてその場を立ち去りました。

その後姿を見おくつて彦七は姫の孝心に今更ながら感じました。

すると先程鬼の面を見て逃げていつた家來達は道後左衛門をつれてかけつけましたが、大森彦七が、その場をつくらふために、わざと鬼になやまされて氣の狂つたやうに騒いでをるのを見て、

「お氣をたしかに、お氣をたしかに」といつてなだめるのでありました。

### お日様と薔薇

かしむかしの大昔には、薔薇の花が、みんな真白でありました。紅や淡紅や、また黄色の花などは一つもございませんでした。

ある朝のこと、白薔薇の薔薇の一つがたいへんにはやく眼をさました。見ると朝の美しいお日様がもうお上りになつて、この白薔薇の薔薇をにこくと御覽になつてゐます。そこで薔薇は、



「お日様お早うございます」と御挨拶をいたしますと、お日様は、  
 「おはやう」とおつしやつて、やつぱりにこゝろ御覧になつてあま  
 す。それがあんまりへんなものですから、蓄は、お早う御覧なさい  
 「お日様、どうしてあなたはそんなに私を御覧なさいますの」と尋  
 ねました。  
 「だつてお前はあんまりきれいだから……」とお答へになりました。  
 白薔薇の蕾はそれをきくと俄に恥しくなりました。  
 「まア……」といつてうつむきました。そのはず味にさつと顔を

あかくしました。  
 それがそのま  
 ま淡紅色の花と  
 かはつて、今も  
 あのやうに優し  
 い美しい色の花  
 を咲くことにな  
 つたのでござい  
 ます。



母さん猫

毛の母さんが日當りのよい庭の芝生に出てゆきました。

一一一

「ニヤニヤ玉坊や、こゝへおいで此處は暖かいよ」と申し  
ますと、子猫の玉坊はあまえながら、

「ニヤアニヤア母ちゃんおつばいよう」といつて乳房にすがりつ  
きました。

そこへむく犬のジョンがのそのそとやつて來ました、玉坊がそれ

を見ると、

「こはい！母ちゃん！」といつてしがみつきました。

母さん猫は、

「いやなひとねえ」と睨みかへして立ち上り、玉坊をつれて築山の  
べんちの上までゆきました。

「ニヤニヤ玉坊や此處がいゝよ」

といひますと、玉坊はまたあまえながら、

「ニヤニヤ母ちゃんおつばいよう」といつて乳房にすがりました。

するとそこへジョンがのそのそとやつて來ました。母さん猫は驚

「あらまた来たわ、仕様のない」  
どいつで急いで様側まで跳びかへり、そこにころりと横になつて、  
「ニヤニヤ玉坊や、もう此處なら大丈夫だよ」と申しました。  
「ニヤニヤ母ちゃんおつぱいよう」と玉坊が縄りつくその後から、  
ジョンがまたのそのそやつて来ました。  
處が母さん猫は今度は逃げようとはしませんでした。ジョンが鼻  
を猫のそばへつき出したその時、母さん猫は俄に跳ねおき、背をま  
るくして、

「フーッ」とうなりました。  
その凄惨な姿にジョンはび  
つくりいたしました。あわ  
てて尻尾を垂れて逃げ去り  
ました。  
母さん猫はそこでやつと  
氣樂に日向に寝ころんで玉  
坊にお乳をのませることが  
出来ました。



賢い鶏

雛

をつれた牝鶏がお庭の隅で小麦を一粒拾ひました。

「鶯鳥さん、鶯さん、どなたかこれを蒔かうとは思ひませ  
んか」といひますと、鶯鳥も鶯も口を揃へて、

「いゝえ」と答へました。

「では私は蒔いて育てますよ」といつて牝鶏はそれを蒔きました。

小麦はやがて大きく伸びると澤山の穂をつけました。牝鶏はそれを

採ると、

「鶯鳥さん、鶯さん、どなたかこれを水車場へ持つて行きませんか」

といひますと、鶯鳥も鶯も口を揃へて、

「いゝえ」と答へました。

「では私は持つて行きますよ」といつて牝鶏はそれを水車場に持つ  
てゆき、粉に軋いてもらひました、やがてそれが出来て来ると、

「鶯鳥さん、鶯さん、どなたかこれでパンを焼かうと思ひませんか」

といひますと、鶯鳥も鶯も口を揃へて、

「いゝえ」と答へました。

「では私は焼きますよ」といつて直きにおいしいパンを焼きました  
そこで牝鶏は、

「鶯鳥さん、鶯さん、どなたかこれを食べようと思ひませんか」と  
いひました。

「今度は鶯鳥も鶯も口を揃へて、

「私が食べませう」

「私が食べませう」

といひました。すると牝鶏は頸をふつて、

「いゝえ、それはなりません、このパンは私達<sup>わたしたち</sup>が食べるために出来

たものです、

さア雛兒<sup>ひなご</sup>だ

ち、はやく

来ておあが

り」といつ

ておいしさ

うにたべま

した。



## 百合と赤ちやん

ア

アイヌの國では杜鵑が「母さんお乳、母さんお乳」といつて泣くのだといひます。それにはこんな由來があるのです。あるアイヌの母さんが、可愛い赤ちやんをおぶつて山へ百合を探りに行きました。

するとその山には澤山に百合がありましたので、アイヌの母さんは探つても探つても取り盡されず、とうとうおほきな一山の荷をつ

くりました。そこでたいへんによろこんでそれを擔いで歸りました、そのときあんまりあわてたものですから、山の中に赤ちやんをおきわすれてしまひました。

さて百合を家におきますと、赤ちやんがゐないことに気がつきましたので驚いて山へかけ戻りましたが、そのときはもう赤ちやんは山にもゐなくなつてゐました。あちこち母さんは血眼になつてさがしましたが見つかりませんでした。その時、空を「母さんお乳、母さんお乳」とないてとんでをる鳥がゐますので、アイヌの母さんはその鳥を自分の赤ん坊が化つたのだと思ひ、後をおつけました。

しかしとうとうそれを捕へることが出来ませんでした。

これから杜鵑は赤ちやんが成つた鳥だと申します。



### 氣の好い熊

## 森

の大きな樹の洞に一匹の熊が棲んでゐました。それは體はたいへん大きいが、まことに氣の好い性質で、どんなに嫌なことでも「いやだ」とか「いけない」とかいふことの出来ない熊でした。

森の動物はみんなこの熊のをちさんに懐きました。その内でもお白さんといふ母さん兎はいつもこののをちさん熊の家へ訪ねて来まし

た、そしてその度にお白さんは、「自分の子供たちはみんないたづら  
てお行儀がわるくてほんとうに困つてしまひます、」とこぼすのでし  
た。ある時もお白さんは、「子供の内でも茶目次はあんまり悪戯がひ  
どいから時々押入へ入れておしおきをします、」と申しますと、をぢ  
さん熊がそれをきいて、

「そんなことをするものぢやないよ、いくら悪戯をしたつて撲つのは可愛さうぢやないか」といふのでした。

ですからこのお白さんが家へかへると子供たちにいつもこのをぢさん熊のことを話して「ほんとに深切なおぢさんだよ、お前たちが

おとなしくするなら連れていつてあげよう」

處がまだ一度も連れてゆかれないうちに、この兎のお家では、たいへんな事が起りました。それは母さん兎のお白さんが、朝はやく村の方へ菜を採りに出かけたきり、いつまでたつても歸つて來ないのでした。多勢の子供たちは野原をばうさがしましたが見つからず待つて待つて待ち續けましたが、とうとう歸つて來ないうちに日が暮れてしまひました。

そこで兄さん兎の茶目次は泣き騒いでをる弟や妹をみんな集めて申しました。



「みんなお聴き、母さんは屹度畏におかゝりになつて、遠くの村へつかまつていらしたのに違ひない、もう僕たちの母さんはゐなくなつたんだよ」

それをきくとみんなは大きな聲でエンエンと泣き出しました。

「困つたなア」

「御飯をくれるものがないなア」

「お腹が空いたなア」とめいめいはいひますと、茶目次は、

「どうも仕方がないから、私たちはこれから母さんのよくお世話になつた熊のをちさんの處へいつて相談をしよう」といひました。

みんな「さうしよう、さうしよう」といひました。

そこでつぎの朝はやく兎の子供たちは他所行きよせゆきの着物きものを着て茶目次に連れられ、をちさん熊の處へ行きました。洞木の前まで行きますと、をちさん熊は多勢おほぜいぞろぞろ來たのにびつくりして洞の入口へ出て來ました。

茶目次はをちさん熊の前へ出ると、ていねいにお辭儀をしました。

そして、

「私たちはよくをちさんにお世話になつたお白さん兎の子供でございます」と申しました、すると後にならんだ子供たちはみな口を揃

へて、

「お白さん兎の子供でございます」といひました、をぢさん熊は「さうかえ、よくみんなて来たねえ」といひました。すると茶目次は申しました、

「昨日家の母さんが餌を取りに村の方へおいでになつたきり、もうお歸りにならないんです、僕たちは困つてしまつたんです」といつてハンケチを顔にあてました。すると後にならんだ子供たちは口を揃へて、

「もうお歸りにならないんです、僕たちは困つてしまつたんです」

といつてハンケチを顔に當てるのでした。

をぢさん熊はそれをきくと可哀さうで可哀さうでたまらなくなりました。そこですぐ、

「そりや困つたのう、いゝからをぢさんの家においで、をぢさんがお白さんの代りにお前たちの世話をして上げるよ」と答へましたので茶目次をはじめ兎の子供たちはたいへんに喜び、

「どうも有難う」と一緒にお辭儀をいたしました。

それからこの兎の子供達はをぢさん熊の家のもものとなりました。

處が初の半日位はみんなお行儀よくしてゐましたが、をぢさんが

まことに氣が好くて、ちつとも憤らないことがわかりますと、直に  
いたづらを始めました。

狭い洞の中で鬼ゴツコをする、駆けつくらをする、かくれん坊を  
するといつて戸棚に入り、そこにしまつてある蜂蜜を甜める者もあ  
れば、椅子をいくつも積み重ねてお城取りをするといつてひつくり  
かへすものもある、泣く、掴み合ふ、さすがのをちさん熊も手がつ  
けられないので、うつちやらかして晝寝をしようとしみますと、こん  
どはをちさんの耳に藁屑をいれてさわぐといふ仕末でました。  
そこで憤ることの出来ないをちさん熊はとてもたまらなくなり、

とうとう洞木のお家を逃げ出しました。

すると兎の子供たちはまた困りました。

茶目次はみんなを集めて、

「をちさんまでゐなくなつたよ、だからいたづらはお止めといつた  
ぢやないか」といひますと、みんなは口を揃へて、

「だからいたづらはお止めといつたぢやないか」といひました。

茶目次はまたいひました。

「だからもうこれつきり僕たちはすつかりいたづらを止めようぢや  
ないか」と申しますと、みんなも口を揃へて、

「これつきりいたづらは止めようよ」といひました。

そこですつかり相談をきめてからをちさん熊を捜しにゆくことにしました。野原へゆきますとをちさんはやつぱり罾に懸つて苦しんでをるのでした。

子供たちはそれを見るとびつくりし、みんな寄つてかゝつて罾からをちさんを放してやり、そこでもうこれから決して今までのやうな悪戯はしないことにして、やつと家へかへつてもらひました。

するとこの子供たちのだいじなだいじな母さん兔のお白さんも遠く村まで人の子供に捕へられていつてゐましたが、その夜首尾よく

逃げて歸つて來ました。

「おちさん歸つた」

「かアさん歸つた」

と森の兔の子供たちは大喜び、それからたいへんにお行儀がよくなりましたのでいつまでも楽しく暮すことができました。

それを一番に喜んだのは氣の好いをちさん熊でしたとさ。





とおちてゆきます。

「ははッこれは面白いわい」と爺さんは笑ひながら今度は腰の煙草入を投げ込みますと、

「煙草入コロリンスツテンデン」

といひます、つぎに手拭を取つて投げ込みますと、やつぱり、

「手拭コロリンスツテンデン」

とおちてゆきます、爺さんはもう夢中になつて、着てをる着物、はいてをる草鞋、股引、なんでも持ち物はのこらずこの穴へはふり込みますと、その度にコロリンスツテンデンといつて、穴がだんく

大きくなりました。

爺さんはとうとう裸になつてしまひました、そこで今度は爺さんがこの洞穴へ自分でとび込むことにしました。

處が、爺さんの飛ぶ拍子に、大きな大きな響きがして、

「爺さんコロリンスツテンデン」ときこえますと、それつきり爺さんは暫くはぼつとして、おぼえがなくなりました。

やつと氣がつくと、それはたいへんに賑やかなあかるい處へ來てゐました。見ると、爺さんは立派なお座敷の真中にゐて、そのぐる

りには多勢の鼠たちが取りまき、チユウ〜わい〜と騒いでをるのです。

「こりや驚いた、どうしてこんなところへ来たのだらう」と不思議がつて爺さんはあたりを見まはし、きよと〜としてゐますと、鼠たちはよろこんで、

「お爺さん、お目がさめましたか。さアどうぞゆつくりお休み下さいませ」

「こゝは鼠の國でございます」

「いつもお爺さんからいろんなお世話に預りますので、今日はお禮

のしるしまでに、御馳走をいたしませう」といれ代りたち代り挨拶をしますうちに、山のやうに御馳走が据ゑられました。

爺さんはやつとおちつきますと、そこで鼠の御馳走をうけて、いろんな鼠の踊や藝當も見物いたしました。

すつかりお腹もふくれましたので、

「どれ歸りませう、たいそう御馳走さまでした」

といひますと、鼠たちは奥の倉から小槌を持ち出し、それを爺さんに渡して「お土産にして下さい」といひます。

きけばこの小槌をふれば、なんでも望みの品が出るといふことですから、爺さんはよろこんで持つてかへりました。

かへるとすぐ爺さんは婆さんにも見せて、自分の望みの品を振り出しますと、御馳走も出れば、着物も出る、おしまひには大きな家まで出ました。

そこで爺さんと婆さんとはその立派な家に住まつて、毎日好きなものを小槌から取り出し、何不自由なく暮しました。

欲といふものには限りがないものです、ある日婆さんは「この上には米の一ぱい入つたお庫があつたらどんなによからう」といつて

爺さんにすゝめますと、爺さんもそれが慾しくなりました、そこですぐ小槌をふりながら、

「出ろよ出ろよ、米庫出ろよ、出ろよ出ろよ米庫出ろよ」と幾度も幾度も念じますと、忽ち

「ハイ、ハイ、御用は」

といつて出て来ました、がそれはお米の庫ではなくて、子供の盲按摩でした。爺さんも婆さんも驚いて逃げ出しますと、その子供の盲が幾人も幾人も、

「子盲出ました、御用は何だ」



「子盲出ました、御用は何だ」といひながら、ぐるりから取りかこみ、とうとうこの爺さん婆さんを杖でつゝまたはしてしまひましたとさ。



### 道草小太郎

兄

の大造は體がぶくぶくとふとつてゐましたが、まことに懶者でした、弟の中助は丈ばかりひよろひよろとしてゐて、ちつとも父さんや母さんのいふことをききませんでした。三番目の小太郎は體は小さいが、物ごとによく氣がついて、何をするにも二人の兄さんよりはよけいに働きました。

三人の兄弟はだんだん大きくなりましたが、何一つ定まつた仕事

も持たないので、貧しい家はいよいよ貧しくなり、このまゝでは暮してゆけなくなりました。

そこで三人は打ち揃つて、野を超え山を超えた向うにある都へ出て、仕事を見つけて働くことにいたしました。

兄の大造は太い脚でドシンドシんと歩きました。次ぎの中助は長い脚でヒヨロリヒヨロリと歩きました。三番目の小太郎はその後からチヨコチヨコと歩きながら、道傍に蝶が飛んでをるといつては立つて見、鳥が巢を造つてをるといつては覗いて見たりして、始終見る者聴く者に氣をつけてあるきました。

三人は森の側まで来蒐りますと、その森の奥で、勢ひよく木を伐る音がいたします。小太郎はそれをきくと、

「誰でせう、たいそう威勢好く働いてゐますねえ、見て来ませうか」といひました。すると大造は、

「見るなら見ておいで、僕はこゝで休んでをる」といひました。又中助も、

「そんな物を見たつてなんになるもんか」といつてわらひました。

小太郎はそれをきくと、

「ちや僕、ちきに見て来るから、ちよいと兄さん達はこゝに待つて

「わて下さい」とさういつて、とんでゆきました。

いつて見て小太郎は驚きました、それは森の奥の大きな樹のまはりをも、一挺の斧がひとりて動いて、チヨンチヨンカッン、チヨンチヨンカッンと伐つてをるのです。

「オヤ、斧がひとりて木を伐つてをる」といひますと、その斧はヒヨイと立つて、

「これは小太郎さんようこそおいで下さいました、私はあなたを待つておりましたよ」といひます。

「君、ひとりて働いてゐるの」とたづねますと、

「御覽の通り、私ア此處にうツちやられてから一年も経ちますが、じつとしてをるとだんざん錆るので、もう働きたくてたまりません今日は幸ひお天気もよいから、ひとりて働いて見たところですよ」

「さう？ それは面白い、では斧君、そんなに働きたければ僕の家來にならないか」

「はい、さうなすつて下さつたらうれしうございます」

「でも大きくつて持つて歩くのもたいへんだなア」

「いゝえあなたが家來にして下さるならばいくらでも小さくなります、さア手を三つうつて下さい」

「よし、ちやうつぜ」

そこで小太郎はシャン／＼と三つ手を拍ちますと、その拍子に斧はバツタリ／＼と三度轉がつて、小さな玩具のやうな斧にかはつてしまひました。小太郎はその斧を拾ふと、右のぼけつとへいれでいそいで森を出ました。

小太郎の出で来るのを見た口の悪い中助は、

「物好き屋さん何があつたかな」と訊ねました。

「斧が木を伐つてゐましたよ」と答へますと、

「そうか、それは面白いものを見たね」

と二人でわらひましたが、

「さアはやく行かうぜ」といつてそのまま歩き出しました。

森を越して山にかゝりますと、今度は岩のごろ／＼轉つてをる崖の下へ出ましたが、その崖の上でカツチン／＼と岩を割る音がきこえます。

小太郎はまた立つて耳をすまし、

「誰が崖の上で働いてゐるのだらう」といひました。

中助はわらつて、